俳諧發句類聚

上

911.3
八
上

清顧彥子輯編先
以棠園案校刪定

[illegible]

書肆　菓枝堂梓

今既不如昔
後當不如今

奚東　玉峯爲則

發句類聚序

我芭蕉翁之流風也素飄蓬之遊伎
而於好俳道化誹平常也翁之易
成者矣是以隂晃如年喝之日繁猶
孫焉甘然于春于秋于月于花及探題
練率句者翁從前之作仿望洋乎不
為不難渇矣獨時涼佛緣夢之二子
然其如此有明題類題之二集行乎
世矣徴句有益之魁者也令茲友人

青蘿編著雪門也如輩可爲標
準者四時名曰發句類聚一日叩余
草扉而示之且乞册定余覽其句之金
玉篇之相振不雪兒女輩学玉維君畫
老成人懐之則是左右取原焉欽之
師輔同志青蘿之斯舉可謂篤信
斯道者也走俳諧維小伎思遠
趣廣矣況此集古人以爲軒技
今人以爲枝葉森然具列如其刪
定余豈敢乎只恐世之観之者

遣青毅之勤勞不敢甚良散焉
因氷黒庵中一筆哦之暇聊
裁蕪詞以冠其首云

文化四年丁卯秋七月上旬

深川隠士　八洲寥松題

武峯鳥明書

例言

一 數限ハ津て古今の句をまし入出せといへどもまづハ多く
古人と哉を追て二編を著せるも人の句とせず擇べし

一 此集にんと用ゆるハ既二十有餘年也よ勢して志るし置る
草稿や、五七字句になる故今本に鐫せるにおよばず
氷黒庵の删定とこれハ先年なしきるものゝ纏羅し
のせたくおもしくせ且おく識る人もあれど其作ゆへ
のやはこれ等の記憶にとゞめざるハ求るにいとまな
なきれハ織くし猶彼是も容さる俳士への起れ
嗣編の時にし補ひかへすべきなり

一 遠き境よりおくるハ僅一二句を捨ひの我遮鐵を好み

広く識る示とあく拙きを廣くきわむる人あらは實に二集
の本なるべし

一 雲門にあそぶる人にも思ふに勝景の圍にある趣は生ずるよすがの世
を哉を見思ふに諸名家の言葉に紅翠の深きを慕へ入れしや

一 風調ハもとより撰者の標る所にあらず褒貶いづれとも合ふ
よりかけ沙汰せん事難かるべし此集ハ大概を仮初なる
ものとさし結ぶこと成り雅なるを擇とも門く

一 かゝる志のわたり此るを絶えましまさし人ある者の句
出て出しぬる者只集中に動きある句の志きを見て

一 ふるえんなかるべし

青顧廬了輔識

春之部標目

正月

元日 初丁　元朝日　三の朝　若水 二丁　立春

初夢　初日よし　初春　若の衣　初空

若子嬉　松過　元朝祝 三丁　初鳥　若え

福茶中　浄瑠璃　花の春　織且温交　鶯つき 四丁

鞍替　上葉　若菜　子の日　人日

老万歳 五丁　大黒舞　綱曳　破魔弓　けさう文

番郷　傀儡師　猿引　縣石　福引 六丁

羽子　削りけ　小豆粥　白杖　飾とる

左義長　藪入　芹 七丁　ねはん　柳

鶯 九丁　梅 十一丁　雪解 十五丁　長閑 十五丁　麗日

霞　松乃花 十七丁　春草　菫たち　菜蝶

蕗のたう　余寒　御忌　孟春温灸

二月

きさらぎ 十九丁　二日灸　初午 廿丁　彼岸　列見

如月　涅槃会 廿二丁　陽炎　糸遊 廿二丁　出代

蘆角　白魚 廿三丁　蜂の巣　鳥の巣　孕鳥

帰雁　雲雀 廿四丁　燕 廿五丁　雀子　雛子

蝶 廿六丁　蜆 廿七丁　蛤　田にし　蛙

猫の恋 廿八丁　接穂 廿九丁　挿　木の芽 三十丁　土筆

薊　蒲公英　[illegible]　独活　焼野 卅一丁

春雉　春耕　種蒔　苗代 卅一丁　[illegible]

山笑　春日 卅二丁　春夕 卅三丁　春暁　春風

春雪 卅四丁　春の海 卅五丁　春水　春寒 卅六丁　春月

春艸 卅七丁　春潮　春山　凧巾 卅八丁

三月

雛 卅九丁　曲水 四十丁　雛合　草餅　[illegible]

三の芹　ゆきつき　[illegible]会　汐干 四十一丁　小鮎

海苔　桜草　桃　桜 四十二丁　花 四十三丁

春の物 四十六丁　きく苗 四十九丁　若艸　菜つみ　躑躅 五十丁

海棠　梨花　藤　山吹 五十一丁　永日

炉塞 五十二丁　行春　三月尽

發句類聚　春部

青巓盧了輔　編輯
八条園寥松　刪定

正月

元日

元日や晴て雀のものかたり　嵐雪

元日や傳法いよ〻法達の命　蓼太

元日も菓子舗ひらく當世屋　天府

元日や忘れきらふ涙の海　普成

元朝や溝掃よせて雀の聲　完来

元日の町や日たけて玉樣笛　得魚

元日やことに傳あるつはもり　魯洲

元日や人淋しき小田のむらし縄　一鷺

元日の人すなりぬ文鍋　魚交

元日とこゝろ申せよ寒さかな　午心

元日や母と酒くむ白拍子　イセ 銀竹

元日やくもるおもかげ人形かな　ヲハリ 曉臺

元日や□□□□□六ッのかね　寥松

初日

阿ぶるゝと初日を法撩元　東登

もつしの川月さし出たる　班象

くも井より初日の出　蓼太

海初日より小田切　スンプ 掬井

三ッの朝

三ッの朝三夕暮　嵐雪

若水

若水や汲む人なし　蓼太

色井や□□□□皆ほる　浣花

立春

年既明て達磨の尻ひらかな　嵐雪

□□□□□の□□を練るかな　吐月

木のくるま門の□□□□　故 班象

初夢

□□□□□□□□□□　午心

初暦

初とよき□□□□□　蓼太

□□□□□□□□□□　吐月

初春

□□□□□□□□□□　東登

もつもや男□□□□しき　月守

初春や猫□□町人□　寥松

初空
若菜
松飾

そなた迄おなし春なりけさの春　スルカ 燕来
けさの春きのふも持て帰りけり　遠江 蓼主
井戸ひとつおくれしよりけさの春　蓼太
まつ鳥やはこりさつめて霞むらし　故 斑象
初空や嘉の居たる淡路嶋　スルカ 梧泉
若菜摘みかゝる人も嘉もなし　得魚
若の朝に門松すゝき皆ぬ　吏登
嘉くれし民の人よ松飾りさり　不騫
門しめや第かくして松の葉　六窓
口松や若菜の餅を売れ出き　秋杵
住の江や生りて種し松かさ　太喬

年徳
初硯
初鳥
若菜
福壽艸

年徳のゝかへ松かさ　雷堂
年徳もかへ松のゝ掛るも　物我
一字つゝ氷を出るやか川硯　吐月
嬉しきの二字をかきぞめ初硯　故流
鳥ゝも八畑初の初ゝ　班象
ゝ初鳥ゝや鐘をつ鳥　午心
若菜や（中巻）柱八茎八本も　蓼太
福壽草蓬萊さなるかくゝ　大江丸
作りゝ八おなつゝしゝ壽草　木丈
家しくやいつもの福壽艸　午心

涛降

涛降に春の心をさとるあるじ哉　湧江

おさうりや聞とおぼしき誰が春　年心

四十まで聞かざ鉄尺も郷の春　嵐雪

人おもかしかる家かし花の春　蓼阿

西川ハ何処におりて花の春　冠羅

何ゆゑ妹おかし　おもらハ去のほる　三鶴

花の春

人をと花の春と祝よし音なり　普山

半ゑのよふるや民の春　蓼太

大名の男様の白江戸が春　吐月

海川に栄ゆるもし玉の春　完来

我の昼や座敷の数も内人数　元恐

歳旦混交

喰つみ

ほつくりと喰つみ何ほ丈婦かな　花堂

三線に喰つみおしけや廿日迄　雲松

雑煮

雑煮にも左に取るかたも和子が箸　香蓮

曲れ縁や薺ほとちるちらり　鳳堂

七種

砕けては七草さそせ流し客　吏堂

七草や七かなくらき八日月　雲翁

つりハ急て叩き冬菜仏の膳　蓼和

七草のおもつくれ女この婢　周楽

七種が翌まつ七和の誰　珈象

翌セ今宵ちあり七草菜　冬人

行燈の基にあかりの薺哉　寒松

若菜

起と取揃へたり七種のうちまくら　（敬）阿象

若菜摘やことしの春は新朗　玄兎

急ぐ手の先にこほるゝ新若菜　祇川

摘ませ見れば女の日くれ若菜かな　スルガ 茶鶴

きのふまで踏し野は若菜かな　梧泉

海中は一谷に起てあつな哉　吐月

さも何かぬ野辺や若菜つむ川　楚岸

何ちらか野の道にあひし若菜かな　吐月

子日

子の日ある引そめてけしちよの門　成美

須臾まで月となりまでも小松哉　護物

人日

人の日やけふ人の日は松の風　班象

人の日はおきてみまそる伏家かな　蕉雨

郎の日や似たよふ草も若菜なれ　升古

人の日は人知らずに寄せ山はよ[illegible]　了帆

恵方参

知る人の一時に来たる恵方参　雪萬

大黒舞

大黒舞さすらふ女にまさりけり　吏登

綱引

綱引や鍬(?)庵草の里くらし　蓼太

破魔弓

まほろや大内様家の道を押　千心

破魔弓の今を泊りて来る記　寒松

けさうぶみ

艶類のむかしむかしやけさう文　蓼太

畚卸

正月は遊び仕事や番おろし　雪瑚

豊作と夕日ひろふや番おろし　吐月

傀儡師

世の中はたけきものゝ世よ傀儡師　完来

ともかくも淋しからぬ傀儡師　華太郎

恋しらぬ猫さへくるしくいらいらし　吐月

たゞき代の笑ひ拾ふや傀儡師　六息

何の猫も恋した果やくるいらいし　子変

猿引

猿引や巴峡を巡る流れの水　菜太

さるひきや唐土の呼子鳥　時中

猿引やかせまつあてもなの月　汎象

深山木の一櫻三味線や猿廻し　吐月

猿引やまてろの縄の其みしらぬ　可備

縣召

一夜居持ぬ顔もしあるらん　菜太

福引

情も捨ぬ史何くれ何と宿　午心

福引は水にあまりて淋しし　大江丸

宝引の蜘の囲分けて静かなり　吐月

ぬく引や足ふるへの根なし草　史楓

乙女は福引上手なりけり　午心

羽子

やり羽子や月の中より落る星　蓼太

羽子板やまださむくの縁流　六窓

やり羽子は中を大八車かな　白麻

削掛

我門とけつかけから五郎　蓼太

北隣の…削りかけ　午心

…削掛　寥松

小豆粥

正月ハ淋しいそれらはつきあゐ　班象

塩漬のさくき白ひや小豆粥　故流

鹹きよれつねつのやあつおうゐ　寥松

三盃れ饗文いくよ小豆ら西　了脯

粥杖

かゆ杖乃若ふてよんき力うら　吐月

かゆはえやいつのかしぬたえ卯月　馬耳

餝る

松とりてさきらみ室をおはしらば　月守

左義長

きれたし人ひちあくて左六り松　寥松

左義長やこそしも谷ふの夕けむり　仝

藪入

藪入やうしろもまれぬる花七日　婆心

やふらりや夜のくみ直まはり　吐月

藪入やや花の晴着を降られ痛　不騫

やぶ入の宿やともかく済る二日　祖白

藪入の見せも小豆れ煮るうち　洛 蕪村

やぶいりや柳さかしき出て日のながき　吉由

藪入やことし賑ふ合阿弥　十六 大江丸

芹

芹そくすゞしれ田井の流れ　月棠

我ふ手ひそきうあらる摘芹かな　吐月

鮮ならぬ芹の香のぼる小門田の水　スルカ 郎娥

芹焼や嵐の音しける女の部　故六

伺ひ侍の紫ふくさる摘芹かな　信中 於羽

年とよく見ハみしられ田芹かな　不眠

水ぬるむ
柳

ぬるみけん鴨の寒さにさそはるゝ水の月　蓼太
風の茶に枝つく燕や柳かけ　嵐雪
むすぶ節も結びたれぬ柳かな　吏登
むつとして庵生て稚子柳かな　蓼太
青柳やむかしくの橋ひとつ川　三鴿
明かたの月にうちかけて柳かな　文母
青柳や雨にてもそれにさらしけに　魚汶
うつらしきなかしやしく名物きき　麦氷
市中に挿てまかき柳かな　普成
青柳や八ッの見さし我計見て縫　完来
遠くの木の柳も繁みて柳かな　石髭友
山畑にさして筧の川柳かな　吐論
柳見て雨ふりぬも永き日の卯　蓼太
一日の春みそかつ柳かな　宇平
立ぬ葉乃かよふ嵐も柳かな　青橋
松よりて柳の春に名の分かれ　曙鳥
春なれて八幹のつまゝし柳かな　吐月
つき入て内より見ても柳かな　六窓
何とかく二月まかし柳かな　乙児
青柳や佇まぬるもよ篝いさき　月巣
曉の朝け小川柳かな　鳩丈
古追ひ女をおふかな柳かな　僊古道

さくら日和のさかり柳かな　南羅

石橋をわたる橋に流れ柳かな　故 班象

ふるさとの春をつゝみぬ柳くの葉　涼花

隠れて帰る雨の柳かな　上毛 素輪

青柳やむかしの花のつまとり　蓼太

むら雨て猶ぬれし柳かな　嵐亭

柳見て柳の木やある心の夕月　武府中 維谷

見掃てかいた跡のある柳かな　巴人

山ざとは人ても誰に柳の雨　月皐

柳ちる舟の影も此川かな　牛毛

折くハ色ぬれてよき柳かな　洛 蒼虬

青柳や二筋三筋老木より　柳居

色つきそふと柳の光り日さしかな　九皐

春柳も吹まれれつる甘泉　甘泉 不朴

柳の芽毛ぬれきれ見しく　氷花

さまて見れは絵涼き柳かな　完来

青柳や何れけりぬ夕月雲　雲松

人出にぬハさぬ柳かな　大江丸

都出て見れた柳に夕日かな　雪萬

柳植て隣のとき心一面　洛 蘭更

きのふの柳見るから今のかな　笑和

さし柳風持ちよき色かな　永蔦

鶯

鶯や書院の西戸くらしける音　嵐雪
うぐひすや我も人もちゞむ膝　吏登
鶯は九ツ頃から川音　蘇太
うぐひすや山路も邪魔き相手　宜春
鶯も人見ては竹の宮きげ　松風
鶯や竹なに枝のとまる哉て　虚舟
うぐひすや絶き日和の夜ふけ　吐月
鶯や我か邸の谷つ音　月阜
鶯や雨の姿の中や隣　上宮
鶯の鶯を聞く時き書く　雪珊
うぐひすやよくは何ある百姓家　寥松

うぐひすや空の深くは日に高く啼く　班象
鶯や牛を河岸へ飛て来く　普成
うぐひすの谷は日ゝに出くは　治　春坡
鶯は我にも流れてすゝ門　春蛾
うぐひすや障子でもやの宿の庭　二鳴
鶯の世く起きに初音部　雪衣
鶯やうつくしき花にて杖　吐月
うぐひすや千里の我に出てる雪　月守
鶯や我か日は春の夢　年心
うぐひすや廿一朝も寶ある　一鳳
鶯の声やかめつきて竹の中　スルガ　浦秋

鶯にねらひ寒する山路の春　嵐雪
鶯の谷吹下ろす杉の那　蓼太
うぐひすを捕て啼里はなし　老鳥
鶯や喜(?)なき枕元もなくもがな　秋杵
鶯の聞て来る家の南　月巣
うぐひすや小松林も谷の家　完来
鶯の呼吸も見定る日和かな　新潟 翠兄
鶯や何もさき喰つての春　普成
鶯の飛もあるらむ今日かな　信中 柳荘
鶯や鳴て過行(?)小侍　ナリタ 大守
鶯や膝日暮し畑の人　蕪村
鶯の梅より来ても竹の枝　信中 猿左
鶯や枝も流るゝ竹の代　黒露
うぐひすや刈枝に身を揉く嘯　東川
鶯やうきに思はぬ藪の春　浴 嘯山
鶯や昔の人の来る山路の春　大六 魯隠
うぐひすや老を捨しもなかりけり　武丸
鶯や谷間の日に櫻を見る　萬山

梅

梅一りん一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪
梅咲て何かは老はなかりけり　吏登
独(?)を業わすれて梅見かな　蓼太
至るは見さくいやし梅の春　沙羅

梅か香のうつれ〳〵に散りけり　白麻

梅か枝に乞しと思ふ夜道かな　六之来

梅木屋の咲せ見よ梅の花　吐月

梅に来て蝶の見る梅の月夜かな　宇平

朧るの佗るもりやむめの宿　魯た

行く庭もふきふ梅の匂ひけり　玉二

ひよ鳥に何かくれけり梅の花　不寒る

梅の香を何しも人の垣ほひ哉　既明

出立たひ来や揉めん梅の宿　若洤

梅うや云ま人は春見まれあき　欽丈

梅うや心まと隔てし御簾の外　壽鹿

みな底や小松の中にいさり梅　普成

梅一りん然も老木のおもひ哉　雷堂

梅に春もなきに於眠る伏家かな　下リ　吐雲

人こて詠る夜より外の梅かな　蛟牛

梅うや夜とめてさき夜の傘　朴古

谷の梅香を待に配りけり　秋　路風

下さぬ乃人には蒙ぬ妙梅かな　寅扶

しら梅や北野の茶屋に角力取　洛　蕪村

おきまちる二月は梅に等けり　午心

ちあさくわ誰踏をちかく畑のうち　雪路

巨燵から梅見て居るも亦養生　大江丸

菌しきる畠のりりも梅の色　班象
梅咲て花屋に梅ハなかりけり　宜麥
香に発るいつこを月そ若梅哉　蘭尼
はちはちと梅さく畑や高上里　蓮佐
梅咲てこゝ孤をあつしと捧る秬代　セキヤト 燕山
草の影うつりて梅の籬かな　當雅
雀啼て藪の書梅咲にけり哉　節句
かくも鬼き借人しけり月の梅　大江丸
梅しるく蕃ちて過けり折戸　荘丹
梅が香やさそひ当る枝の衣　橘奴
むめの花さかさハ妻を嫌りけり　六葉

まだ寒き山に雪残さしむめの花畑　峨月
かくれしし梅に背して雨の月　巴明
小頭巾を重て香ハ捲しく梅の色　蓀笠
高瀬川しを女行けり梅の宿　雪珊
むめがゝやさそハれ風にも来るか花　阿州 青橋
新寒の比あつめけり挿頭の梅　完来
梅不受婦ゟよせし枝の高さかな　年心
両月の暑りはしめや梅乃ちる　吏仙
伽羅くと咲る梅の行かし那　蓼太
梅さくや扉を春に浮る魚の骨　寥松
お屋敷の梅咲揃ふ花の菊　了浦

雨ふく風も古き記さむめの匂　梅谷
花よつるも香を撰る梅の林かな　白麻
梅の月まなかはる宿に雨（カハラ）　菊汁
白梅や折こ聲も香もいははり（タチリラ）　魚兎
宵の間まても深く匂ふ軒の梅　蹊条
梅の花陽き家擲す西の京　洛　几董
咲梅や咲さまれしかしたより（十六）　石蕨
世の中は折ら所白ひけり梅の皆　六兎
香ふるや枝もなりん梅一木　薬大
乱し里や梅咲ちれは白難波　来義
下草も雲お名にけり也めの花　盆波

いをもしと降雪あらめ梅の花　蕉鉄
日当りよき物干竿や梅の花（ミリハラ）　巴丸
梅まさく田も見えてより　冝麦
寂梅やも捨てをく梅の中　故牛
袖裂て折ける梅の垣根かな　字仏
梅さくや人良ふるき山在所　如秋
むめの花まつさ寺の名の畠かな　菜詠
梅さくや咲きや鳥も宿しけ　咕月
とかし犬にそよりと梅の白かな　風笠
梅一輪をたは匂ひしき香と黄ひけり　帰京
浅茅おいとかへぬ茶ふて梅尺かな　寄奄

春の名残とて畑毎に梅の色　六窓

移仕まる船路よりゆかしき花　何庵

おもくともし梅まさ黒し　月古

梅くゝる翁節居の小家かな　雲洲

梅かをる枝くゞりて流る川哉　秋色

紙鳶の糸絶舟とこに打かけり　子芽

梅折まで奇妙に咲る垣根かな　文枝

何くらき梅ちる雨に味すなり　一壇

生ぬめに小葉露なる山梅かな　升古

紅梅や香なれまで雨の色　宜来

紅梅や家にほひ木のつり　李童

紅梅に地下の切九片かゝつて来了　写居

紅梅や尼門立てる石筆　淵象

紅鳥が水に浮くも解かけ　吐月

遠近の松山して雪消かな　信中 也足

花の宗のやまみ浅解かな　菜兆

雪とけて尺ゐて居る四ツ谷の鳩　道喜

雪消

雪解して猫に枕がかれる　味美

色きしく長閑に剥ぬ麦畑　吏敬

長閑さや夕日にかかる旋綱　天府

長閑

のどかさや気を解居るまもなき　来丈

雲もやきのよけき寄寄かな　了年

齊日

朧月

霞

長閑さや池みもよるに暗煙　雪茶

のどかさよ鶯なれは今日も秋の月　秋良

春の霞あハきしくも長閑こ　風紫

さい日を鶯に似よ人の声　霽松

新月や夏飾さびしき見許　菅雅

門まて旅よ鶯する朧月ハ　玉桂

松をおて花にたえ山かくるゝに　嵐雪

途弱の新飾りてあり春くれみ　蕪太

下細に途村の霞む夕月かな　天府

二三丈日のされまて霞かな　月泉

はるかなるかなたを霞ハ　人左

松たかう見えて霞の外山かな　[illegible]

別けりと不の矢しりつゝ夕霞　平鷺

うるはしく霞みてかな蔵の扉かな　五音

山畑や霞のうちに笠の人　荊文

ゐよ舟に帆よちらすてる霞　錦衣

夕霞都の山ハ雲かな丸し　浪華　蝶夢

うつさる女のあちら見さかる霞かな　園竹

芝上提清れりける霞一面　似洲

さんさめく江戸太なや新霞　蕪太

霞より茂みる能れ獣の郷　不ルカ　松宇

不くしくよ霞に知えて峯の月　雄諧

山門も艸も埋けり霧立来　不騫
浦人の中にまたゝく霞かな　蕪太
出嶌て霧あらん達る夕一の鶏　スルガ　一雅
草霧は水に新たな夕かな　華村
霞見や耳にも晴る小舟の蜜　乙児
此月より消えつ晴る影霧　標江
折に添ぬ影乃心を霧か那　嵐堂
山くの白に霞れて霧の奈　玉宇
沖の帆の今影とらぬ霞の奈　點花
ありたけの小舟出て影く霧　本庄　玉宇
夕霧やからし霧む町の滝　吐月

かすみ逢せて子や思ふらん芦の花　蕪参太
蓮寺霧あきふの雲と池の那　周彦
あしあたま霞つくも秋河の夕霧　臨丞
朝まさに山の見て晴る霧かな　阿音
かた原や大きな木不くも遠霧　寥松
遠く霧川より低き畑かな　其由
何の江とやまでしらぬ霧　松佽

松花

宮寺は春さきよれ松の花　蕪参太
七ッ山も残る上やま川の花　貝水
かさしに花や隣かしん松乃花　スルガ　雪母

若艸

莖立

菜花

春中に朱の御橋やむ川のちらし　不騖

若草とやゝ人らしき日和かな　雪萬

ころも草や山風かよふ垣ねの内　棠兆

鄰何すてゝくきたち賞ん手あそき　嵐雪

くきたちや五条何かうの女房　百里

菜は花となりけき大和河内かな　蓼太

菜の花や霞ふたつる山畠　東府

菜は花の花のかくれ見るも夕かな　良我女

菜の花や年内一ぱいの地まさり　丈足

菜の花や船日の家ひかる　吐月

菜は花や暈のきれる見えりき　斑象

蕗薹

余寒

菜の花や中々流る大和川　月巣

菜は花や?ゝ表見れ小家かな　鈴太

色流る太や菜種の花の柳ゝく　蒹太

菜の花や大根畠八木幡かく　蝶蓑

蒔きの薹わけて人の訪ひかな　嵐室

蕗のたう萩のもとはらし撫しけり　完来

貢ても八兄女草むふきの花　冬窓

蕗の薹使に霜あかせたり　羽笠

雅女の手折に春のかな　蕪太

旅ゆ旅のゑ飯君まき余寒かな　完来

ま寒し障子をはてく夜の音　夢鞋

壬春俳交

かりがねのきこえぬ所てる余寒かな　三上

こと咲るあはれさ余寒余寒かな　詩三（久能）

鵆くと田子の浦から余寒かな　扶老（スミラ）

ひよろりと茶から菜果て蜂の那　草石

出川の寿して来るさむさかな　雨滴

人間にさかりはなしさかえ柳　完来

正月や晴しく光る木綿もの　寥松

法師の林よ柳よ江戸の坂　其徳

吹きえて風はなくやくまくらく　乙児

春めくや山も流をよい在所　蓮佐

有るれし春はなりぬ畑の人　寥松

春めきて人寄り鵆しやさゝなみ　天ろ

正月や子に起きてさゝめの声を　亀乙

何をとも来年さあ知ぬ吉日月　笈雅

正月も三日になれば人ともし　閑更（浪）

来られし祭を筆取るの姥の肉　郷義（番）

正月の都をまかりの小商人　樗良

知らぬ世銭がありなやや女猿　唫風

人うけや田中村墓も正月　道彦

三ヶ日過ぬ坂をまとゑ汁　寥松

鉛くの人もかゝや来かけ帆かけ舩　都重

居るゝぬ書は何ぞし春の人　風紫

古株にひと節芽やもえし田の　蒲丈

御忌

あとをなつけて一日くらしけり　了浦

はらゝらと露ふりし御忌小袖　草阜

衣更著　二月

きたゝきや巨燵の跡を抱也　嵐雪

衣更着よそにつく也海の気色　青羅

きさらぎや歯にしむ星は沸若錆　雄渕

二日灸

涅槃にも八恵あり二日灸　年心

二日灸飯の菜にそへかくしけり　子蘭

きく作る命算へし二日灸　在魯

二日灸過てさむしを活りけり　月丸

手に出る小花の舞や二日灸　大株

初午

非新じ初午月の報謝かな　完来

まつ午や梅の花みる人こゝろ　故班象

初午や樽花ぞつかみ手楽　不寒

まつ川午は早八葉の迎ひ見ひり　文母

初午や足さく空も八十年　文足

まつむまや神燈の数も江戸の子　吐月

彼岸

本門の額よんでおる彼岸かな　普成

ともし灯ふ笑ふおちる彼岸かな　大津 冬柱

彼岸とてあふるおほしち鳥あり　鳥醉

八京もきさらぎ来る彼岸かな　スヽ 梧泉

列見

朧月

列見や[illegible]　師心

中川や[illegible]朧月　嵐雪

板橋の[illegible]朧月　東皇

[illegible]朧月　蘂丈

[illegible]朧月　木奴

有明の海月に[illegible]朧月　六窓

花[illegible]朧月　蘂助

[illegible]朧月　麟上

川止て[illegible]朧月　園竹

[illegible]川里[illegible]朧月　吐月

[illegible]朧月　禾水

むら山を通して月の朧かな　連枝

[illegible]朧月　円巣

[illegible]朧月　石意

[illegible]朧月　千町

[illegible]朧月　秋帆

[illegible]朧月　瓦全

[illegible]朧月　南羅

大名の橋は[illegible]朧月　蓼太

[illegible]朧月　百羅

涅槃會

[illegible]　蓼太

[illegible]　了志

陽炎

何人を招くかけろふ遠山　亭平

ねはんきや佛とハ此文字より　月巣

涅槃会や月の名ごりの今日は　吐月

ねはん像男の涙も哀なり　完来

流年に八不足ハ何にしねはん像　李厚

陽炎の揚よせてある扉かな　菜太

かけろふや汲の川たる綾の上　壽滝

陽炎や中の海より菜舟當　六阿

陽炎の中や田井博人ぶり　海末

あまの家や桜も集めて小松月　不寒

陽炎や思ふやうなく洗蟻　馬耳

陽炎を踏あけりや小田の鶴　月巣

陽炎や眼先に留けば空もし　吐月

かけろふや二葉の苗にかゝる　藤笠

糸遊

糸遊や桂やはなゝる糀室　氷花

かけろふや杉んなりて空の何かれ　嵐雪

出代

出代やゆふハ渕も行かたし　冝麥

牛の氣に入て出代る男かな　呉逸

出代や翌ハ在所ち陸の舞　吐月

出代や是も河内の泉男　司九

出代の行燈つけて別れ菊　皐鷺

出かはりや思ひきれよの慨なけれ　仙鷺

落角

一 お代の鹿ふしよる見 縄笄　互交
おちかりやあやめの後はかはへつたき　年ん
お代やとふしかくふし秘て　六兎
おちるとやりあちこち一手桶　魚淀
あちかりの男に見えぬ洞かな　廿 奥あき
おちかりや甚さあくと古角哉　蕪村
おち付やおちこれ見はなはなり　廿 里ん
お代やうし山くも残の波　明忽
鹿の角あふ蝉子時鳴をりけり　桃雲
落角やこぼかさおりし秋の風　錦城
鹿の角菊あみて御蛛し　磊白

落角や紀の扉むりつかけ　二鳴
落角やめぐりかへし山　木羽

白魚

しら魚や子に迷ひし隅田川　吏登
しら魚や波よけの羽夜ありあり　蓼太
しら魚やしら魚あとの鼓かな　千慮
しら魚や味かけて秋の雲　月巣
しら魚や心しき夜の海より　吐月
しら魚やちいさき陰に江の月　寥松
しら魚に網も河瀬の火に彩る　白麻
比治に沈む魚十日あがりはいい　深松

蜂の巣

巣の蜂の地ききしたる夕きさい　大江丸

鳥巣

いく日なめるよ蜂の巣に蜂も出し　午心

鳥の巣に登りかけたる月日かな　普成

鳥は巣や見あらし流るる木の葉　艸石

鳥の巣や伊甲紫も知らぬなり　月丸

鳥の巣に枝ふりあはぬ雲の松　竒渕

駒鳥

鳴くよ駒鳥顔さしのぞく晴れ　午心

駒鳥の声はころびる岩の上　園女

駒鳥や山辺の旅の記さてろ　大宇

帰雁

別れ程にしるしありけり帰る雁　嵐雪

帰るさは呉ざらりと当は雁　吐月

書し一個の雁の　大江丸

菜畠の菜もし落るや帰る雁　青雨

又一つ小舟夕知れさたまらぬ　可山

帰る雁帰らぬ雁の何となく　吏楓

舟嵐に向ふ姻や帰る雁　保恭

雁小さく見ゆる夜の雨の暮　蓼山

晴のこゝ晦日に雁も帰りけり　菅雅

唐土へ最や西月した当の雁　升六

帰る雁人手もつけぬ春近う　魚汶

紀あつらへ滑つる籾を帰る雁　氷光

唐泥や帰る恩してたるみ帰　月巣

はなれゆく雲を引けし帰る雁　蓼太

雲雀

ちる程より咲ちるん春日影　菅雅
川原の雲雀おかしさ田畑は　寥葉
北のそらぬ晴や雲雀落る花　蓼太
野風の北ぞ遥すぐ雲雀かな　曲川
松風は下に立うくて雲雀かな　豊肆
声ちて野寺の雲雀哉　一貫
雲雀鳴下や遥かに大井川　月皐
揉草の月の雲雀啼哉　寥松
雲雀見えて雲雀哉　中阿
森の朝渚の雲雀哉　有隣

心

野風や空に一節に揚る雲雀　蓼太

燕

二羽と来りて老人は花につばくらめ　嵐齋
燕子入て老人に訓はる菴かな　嵐雪
つばくらめ出て来て出たり都かな　蓼太
湖ふるき寺家へ来ん乙鳥　完来
乙鳥の巣の影は橋より　五斧
ゆきをはる子供見えて乙鳥かな　山朝
傘の都に翔すつばめ哉　雷堂
すて乙鳥寺の勧化　披雲
松ふりて残りつもるも乙鳥　吐月
つばくらや門の松をつくる　可竹

雀子
雛子

多飼の子巣立したるもあるに　吐月
つきくるや親にあはれきものの数　是物
木つくりに足はさまれて雀の子　完来
雀子や大名行列へ入る色　大江丸
囀やきぬるをとるに雛子鳴　蓼太
おもはれる麦の綿ばかり松に雛子　青橘
思ひ出す人の亡きる雛子かな　三思
ますあし巣離生れは雛子まで集　普成
かくれ家へおや子となりし雛子かな　素園
都にたに梅寒白や雛の詳　稲丸
氣[illegible]　果乙

蝶

酒くさき人にからまる胡蝶かな　嵐雪
蝶の羽のきれえ乃留守紙衣の方　吏登
つまむると蹴情を返こてふかな　蘂太
卵もいまだかつりん飛去てふ　宜麦
てふ舟川を出されゐる彩戸かな　月巣
久ぶりぬ花のこ庭て胡蝶の飛　六窓
湯の尾すて来のましき飛胡蝶　善成
朝見への先へ来てゐるかすみかな　吐月
蕪菜て皆戸へおもへは胡蝶かな　文采
春川蝶よ奪ひぬ花園の心ち　かゞ川　其桂

道ゝ花も菜も咲しきにてふてふ　山幸

飛にてふぬるにてふ我ハくもなし　午心

日ね豆たきえし〳〵と姫蝶か　五全

正月を差に二月のにてふ哉　言彦

京ならぬ人に連立てふてふか　彭壽

帝吉るや眠らいの爲れてふ　（女）須美

起きさや座より見て蝶のつ　（人外力）嵐考

またんして流ゞん舟に蝶　寥松

蝶〳〵や浅の友に見らん哉　吐月

閑さや花にうこく月のてふ　志碩

飛ちるまぎに蝶とおもひけり　一兆

硯

角にてふ稀なれる水の差ハ何　琊象

傘寄もさき尺付てふの蝶　（房州）瑞石

大和絵や背中まなれぬ蝶て（スシフ）　雪敲

てふ〳〵はこゝに待まま和ハ　六窓

進士の碑に西日何ゝ流にてふ　漣漪

てふ〳〵よけ飛と何せん新見ん　曽雅

民多くて日もあらぬ硯汁　蓼太

箸とれえもいかりまて書け　吐月

一字ゝ書写して捨ん硯売　完来

子の硯筆すての後も見なりけり　萬山

書もやしきし硯のほとりて嘆（川コハ）　雑迪

蛤

田螺

蛙

汐干がた江を出て帯てり蜆くり　白爲

蛤や焼ずうちを旅日記　迂鶯

捨水とゐみいふく一田螺哉　班象

夕の形を噂きく田螺かな　士朗

鳴を聞捨てゆく田の畔かな　頓吾

よる〳〵や繊瀬と鳴く蛙　嵐雪

入月の跡は机の蛙の声　吏登

つちくれに動く蛙の月夜かな　蓼太

月夜にも思ふぬおもしろ蛙　雪萬

遠くなり近くなり蛙かな　六窓

枯川に澗れきて蛙かな　午心

蛙子や利口になりしやさしさ　渓花

梅あかやおもふ郷にてなく蛙　石髪

三井の清水は田より蛙の声　提國

ゆきゝにも見る伸を蛙かな　吐月

花に咲く梅やなく蛙　一湖

菜の花の細しなくかの川　曲肱

ゆきもとの馬酔木咲けり鳴蛙　菅雅

蛙まで泡ふいて居る夜かな　寥松

蛍待つ蛙の声　楚岸

又かへるつ月を忘れて咲けり　菅雅

無き日の淋しさや鳴く蛙　乙兒

猫戀

初性きゝあて遠くすむかな　螢亦

思ひ捨の尾に蛇もしつ猫の恋　薬太

らちる鄰にいねさう秋この妻　六之来

三日月は眉相かくれや猫か恋　不寧

猫の妻いくちる君か奪ひとり　崑を妻

笑くせてやらん隣の猫は妻　象

恋猫や眉ひそめる淡行燈　萬山

大の尾をを端て通すや猫の恋　子六之

闇は眠の猫をりかやねこは恋　故手南

猫の恋くつしと来て啼も何らん　木奴

恋ぬれて〻ころく〻と女猫かな　此君

接穂

接穂して名や忘れん猫の妻　普成

西ふくにも花またらめおふは恋　吐月

思ひあまりの猫をちかちや高枝から　大江丸

我もつ家は猫も啼かる去迎かな　蘭更

先猫の尾におし恋の恋がな　百里

ひくらいよあとさらよの接穂かな　嵐雪

隣へ接穂くれて戻り道　一兆

老しるむは花の枝のはる接穂かな　秋杵

くしよき心のひまを接穂かな　素迪

四阿に旅のかくさつきありさふ　蒋笠

他接した〻つき不見する蕪かな　了輔

椿

落のかしき月見しと椿かな　嵐雪
いまのかとおもふ椿の咲にけり　月巣
みちあれは花いし落る椿かな　一游
伝ふりし咽に出羽や赤椿　孔濤
蜂花にはいりて落けり赤椿　牛眠
つらつらと椿は去れは夕かな　阿以而
落ちらつ咲き落て椿ち南　琳女
そのまゝは葉もしに手毛椿かな　沙存
落下手れ椿ふ阿ちり向むけり　藻太
山本ゟ戸口の名さき椿のまゝ　園更
こちら向けあちら向けして椿かな　樗夫

木芽

やはらかれ見えぬわくしは木芽かな　二六菴
垣に井の額木飛もぬ木の芽かな　咄月
降や亡まう中は木芽哉　嵐後
木の葉して圓の影日の移りけり　月巣
這出て子は消ゆる木芽哉　三上
去年の這われすこの芽かな　咄月

土筆

秋の種にありしおとつくし　寥松
生る降る中ちも土筆な　画扇
すこしとまた中ゆつくしかな　我佬
土筆出で見て来ゆ　晒足袋　友路

薊

花ならむ出よと見えて薊かな　弥邑

蒲公英

ゑんにハ小日の都多る境ら那　午心

蒲公英や田ハ一面乃水日和　棲蒲

蕨

狗脊は落うち蕨ゟ菊　嵐雪

子蕨やこゝろ山路行便　暮緑

柴船の中より一把さわらびの角　咄月

手にふれて八日かけたる蕨かな　一菓

石原の土を添うする山ハ　嵐亭

旅人の渡給りけも蕨かな　葉為

小峠崩ゑて見つる蕨かな　形乎

盗人に網を喰なて蕨かな　文足

獨活

ゆうしちものハ澤にて作獨活　嵐雪

焼野

春野

山伏のおほきうける焼野かな　六窓

さわらびや茶より多紀野人　蓼主

春の野にけ日暮ろ畑もろもろ　推敲

多見らの人の眉うら春の野や　去雲

春耕

雨日に布留の小田をかへすなる　志静

種蒔

種まきやぬれつゝ帰る雨は音　卜水

苗代

苗代も老のちからや死なきれ　嵐雪

秋風は二葉ながら苗代田　蓼太

苗代や今も昔代のぬ加減　房只　走舟

苗代や木くの余りはなくてよき　荊州

うつしきや蛇もろろし苗代田　冨屋

畑打

迷ふらん萬代限の田乃嵐　氷花

畑うちやされる咲日もふり向く　吐月

畑打は藪入連て戻りけり　方壷

畑うちや有りたけに道因と　一鷺

畑うちや秋のおくれを向ふより　午明

畑うちや清き風を腋の下　蚊牛

道遠き畑うつ人も縁ところ　一巴

隣ある白子畑うつおのこかな　吐月

山笑

藻名やむしり笑ふ山ちらり　ゑ以し

春日

はるの日やちらちらる　全

お連て汐木を拾ふ春の日か　（ヨハリ）暁臺

春の日は浮雲女雲　素丸

鼓屋乃人女子に届ける春日かな　海暁

駅々の富士画けり春日かな（むきしの）　甘谷

春の日や桑名にて語る流しむる　林山

足袋提て浜辺を流る春日かな　午心

春の日は慣いやしき落る松　寥松

佛ともあれ春の日は新し　月丸

水路て帆を見る春日かな　霜蓜

隣から大路の方へ春日かな　牛毛

空山や風雲の殘る春日かな　仙菓

春の日も永田におこる　了輔

はつ春や三井の古き鐘は何ぞと　連丈

汁の井乃海にあらはれて春日かな　兄嗣

春の日乃さし出るかたの天高る　不騫

春の日や淺き山越如來心　貞之

春の日や門ゆく梵論の朝かへし　蓼太

春の日の光あまりて水の月　三鴿

造作に身のつまりゆく春日哉　甫葎

春の日や何のしてみそ七つ前　千丈

此ままに寂泄に妻何る春日哉　周守

芦乃家は見えて風ゐる春日哉　涼花

惜ふく婦を小春の日暮しかな　梅巴

家中にゐる匠出匠と春日かな　周巣

春夕

いねし子の送られ来る春の夕　幸手　文枝

春夜

春の夜を何れ出嫁せよ掛て月　三鴿

するか夜や梅の花ある傘の上　午心

春の夜を築しなり私河の宿　葛人

春の夜や抽好き去る露の外　素迪

履言の手名にたゝく湯春の雪　起石

春の夜や忘られ夫讀る物　ホリ文　萬古

春風

春風や一ト夜ふ絶る空の竹　蓼太

見捨して暮居を知る春の花　周守

ゐ出に吹れとたゞそ春の風　人左

春風

春風のたゝし勤ればや雲は寒　不騫
春風にとふて見ゆる二月かな　披雲
唄ふて出る旅人なし春の風　蓼太
春風に砂子光るや浪の上　六窓
梧の木に淋しさつたふ春の風　蚑牛
何春は春見へ来る春の風　木羽
子供らが菜売る春の風くらし　百年
花摘を待ちかねてや春の風　白羽
春風の吹風をそにさそふ燕一羽　下廿　挿下
梅さくらふらす揺れては春の風　梧泉
何ともなく春ふしき春の風　遥知

春の風塔にうつりて森は紫に咲り　月巣
高き木に花咲くや春暖のにせ　吐月
春風や嵐ふかれて小田の庵　覚我
春風の神より下を吹日かな　漣漪
清水哉乳傘賣らん春の風　婆心
春風やすみの春出て居し舟　下廿　枝雀

春雪

雲雀をとめて止る春の雪　乙兒
見る中に一嬉し春の雪　月巣
はしめ六あみらし春の雪　文母
打ひらく降ての春の曲き　雪巣
降やそは春花雪の山　蘂太

春雪

手にうけて見れぬ月を春の雪　百貢
淡雪やとかくぬ桜に二日の月　和文
春の雪消ぬひとつ晩の京紫　青鳥
春雪や見るに似る魚もなし　完来
春の雪見え来ふるもつもり也　其谷
はるの雪扇もちて帰る日かな　月壺
消えかゝり捨るやえらぬ雪　吐月
雪の路赤坂ぶや牛の油き　魚彦
春雪は消えてぬ降りける雪　淀水
さゝ葉まに降る名残りし春の雪　士朗
春は雪家陰る迄に仕立なり　春鳴

春海

春の世を伴ふて見に行かん　都上
帆柱も帆のもしれけり春の海　蓼太
子を連て鶯の浮ける春の海　不騫
廻廊の灯もとつけけり春の海　水衣
春のよし松ぬきよせて夕かな　我耕
百里行走るの帆や春の海　午心
はるかにて描る野を記せ春の海　長翠
春の海終日のたりのたりかな　洛 蕪村
見えかくれ春の海　蘂松
薄き日も山隠れや春の海　鏡裏

春水

源平も構なく流し春の水　蓼太

春

鮒鮓をあゆともおもふ春の水　魚泣

汲きりて淋しきものか田にゝ　雲茶

楊枝子来てハ幸河の春の水　午心

残山や小松か中ばる春の水　几董

近江路やそこら水の春辺なる　月居

春の水背戸に田作らんとぞおもふ　蕪村

大いなる小判あしかや春の水　嵐亭

浮草は浮かりしたる春の水　月景

岩ありしかし八幸ならしはるの水　吐月

春の水西安堵をぬぐふなり　知来

さゞなみハ先ぞうかん春の水　蒙之

搔くれぬ里くもなし春の水　郎娥

小男鹿の蹄ふこしけり春乃水　完来

春の水涼ふてりふよ岩ひけり　深松

春雨けハ雲れ下くなる水　瓊田

はるの水竹の枝葉の流けり　阿人

雛連て鵜乃くりけり春の水　虚舟

掉さして庭くりぬるはるの水　呉橋

流生てゐ流ぬ日何り春乃水　一鷺

うごきおて解そ入れ京ねや春の水　梧泉

春霜

行秦つて素業に清し春霜の音　了輔

春月

田九ゝ二日踏けはるの霞　乍人

さゝしろき人もさためは春の霞　象松

伴吹根の蓬搗しを後のしも　一井

春の月桜ちる枝ははるか紫　象左

あふ見る心まかりぬ春の月　湖象

ちられは忘れはおりる春の月　秋良

春の月思ひ場にかまうけり　鶯宜

里ちし低ふ花ふけ春の月　西山

入らはあすに解てやなる此月　雪客

嘘無人あもりをは春の月　春岐

小京女の絵らん子をんなり此月　宇暁

春の月枯木みゆけ残松さか　月居

牛率て戻る僧あり春の月　牛甫

目ふ見えぬ雨も降し春の月　スルガ 嵱月

樹ふ風のさはりて春の月秋ふ　荊父

いとあなまた市の雨森や春の月　午心

春の月たるまさりけ流けり　玉蓮

阿さは今夕ふ秋あまさや春の月　象松

見る人ゆるの田みね滞し春の月　熊岸

松枝よ為くてぬ山やも此月　木芝

雨の信ちみよはむしるかも春の月　收牛

花悪る蝶みけあふ月秋ふかな　蓼太

春艸

かげ清しくおく[illegible]春の月　以言山美

うら[illegible]やはるの月　[illegible]婦

春の月[illegible]野山にも　廿まき[illegible]

[illegible]游の中や春の草　抱梧

行[illegible]ぬれて[illegible]春乃游　来门

春游

春の山游んで坊のやどりかな　年ん

人乃息をかけても[illegible]はる山か　[illegible]杉

春山

春の山松も[illegible]八鳩[illegible]　黄雅

春山と[illegible]萩にも　桑古

[illegible]郁[illegible]春の山　雪[illegible]

山游よ八幡よ春の山つゞき　以言山美

春富士

乃かさの見せて[illegible]春の富士　午心

呉服店乃暖簾[illegible]の不二　去兒

[illegible]夷乃[illegible]　セキヤト 三酉

松原へ出れば[illegible]旅　葎宵

[illegible]　嵐雪

几巾

尾の下に我見る人や几巾　吏登

子を思ふ[illegible]や几巾　吐月

一休ま揚て見せ[illegible]　完来

日本へつけて[illegible]几巾　故 班象

[illegible]　素園

[illegible]几巾　長サキ 魯夕

仲春混吏

凡巾ふたふた遠しと知りぬと遠の松　鬼秀

風も京こゝちぬるから始めり　雷堂

糸ふかる春の引やいかゞ乃亦や　萬府

数入の牛移てやいかゞ始めり　六窓

凪くてむ月の出るや凡巾　吐月

玉の緒乃も短し何乃如き　尺布

西へ春ゆきまくや凡巾　桃隣

九重の内も凧何乃いかのほり　班象

月より始め初めの凡巾　六窓

春めかな社ふ河と河春つゝけ　二句半　定雅

百姓の嘗者伴ふ二月かな　普記

雛

三月

石女乃雛かしつく枝ぞ哀なる　嵐雪

いさ雛の端居もかれ初月　葉太

寂りつゝ好む業なり榛の雛　文林

雛ふも何りたきものや袖　餘琳

只さやうに足ひきまされ雛の顔　巴丈

そのやう世の中乃雛乃君　甘谷

居何より人も哀れなる　吐月

まつりき年かくなり儀　雛　子鼎

春の夜乃雛ふ捧ぐるなりけり　衹川

紙雛も人の譲り又ありつも　有棠

つましくと月にそ見る紙雛　菊左

ともし火のさえてきえゆる紙ひゐなかな　兌没

女子なら雛の姿哉つゐ紙にも　富居

雅風は紙にうつし紙ひゐなかな　晴山

雛立て母なつかしき男かな　金甘

只ふたつ文男かしはし雛まつり　月嘯（カハサ）

画に書きるさひゐなくし雛会　郎娥

價さへ見えさま見れ内裏雛　文母

消ゆる灯の雛重し月の筆か　月守

門にお見をはすめや紙ひゐなかな　（故）班象

川竹乃我あり淋し雛祭　遊志

人形よと見ちらん花の雛　家松

紙ひゐなかなそのよそりそれまり　申年

強くと花を打てはる雛の君　禅音

年くに揺へえぬ雛かな　左皐

曲水

曲水やさしろまつり夕月山　淵荘

盃よ人ませきふ浮の白川（白川）　深耕

曲水に強うや古さゑ絵　年ん

曲水や笑うろは盃に遊ぶ出る　楽杠

雑合

きゑくの強うみなり雛会　淡めん

はなは雛ひも何らんやり会　柳糸

艸餅
草餅も集て蝶つくん草の餅　嵐雪
裁屑も女ありける草餅もち　萬乎

糸桜
義秀に門敲せよ糸桜　全

三ッ葉芹
かつしかも[illegible]三葉芹　月貴

胡葱
[illegible]胡葱で女文字　萬太

寒食
狗の火も寒食の日ぞ枝ニ挿　冰壺
寒食は二日すたりぬ藁門　其角
寒食や燭をさしぬ眉わろし　宇心
寒食や[illegible]磯の波　眠家
寒食や[illegible]隣火箕　荷笠
寒食や灰に[illegible]松葉　寒松

汐干
汐干かれ将蟹[illegible]ゆかり　嵐雪
二里ほとゝ月をて帰る汐干かな　速生
拾られて飯の猿たり汐干らし　吐月
帰り路る女まで郷の汐干の雨　萬太
かしこみ月日を拾ふ汐干かな　一瓢
百そち小家をつく越す汐干家　朱義

小鮎
若鮎の続ありの[illegible]　萬右
若鮎の[illegible]　サ志ちん
[illegible]鮎といふ里人を　[illegible]

海苔
[illegible]海苔二枚　萬太

桜艸

桃

海苔ひくや下りあのさゝら姫　吐月

総白し海苔とる蜑の耳はさみ　宇松

夜の海苔引て[illegible]せけり　以梧

三月の地にも潮あしされのかな　左衍

桃の日や鱠に宮人の笑ひけり　嵐雪

山里や桃まりける陰着　葵太

むかしの也桃咲く桃に[illegible]もなし　沙羅

桃の門ふさして表ハ畑に向けり　祖白

わかさや桃の井より流る[illegible]　杭鶯

三日月に見えて七桃に夕かな　茂其

桃も[illegible]前挽て[illegible]の[illegible]　出羽　芦游

入口て盤頭の町やちきの花　麥路

菊花と折てくれけり桃の花　鬼雪

余の花に桃まうくるこゝかな　図竹

出るに[illegible]まきりふに[illegible]し桃の流　沙羅

まきの[illegible]にてハ桃の花見かな　大江丸

むつくと[illegible]も河岸の桃の花　長齋

沙川の流して桃の[illegible]かな　寛鳥

[illegible]のふ桃の[illegible]家[illegible]　三酉

[illegible]つよ[illegible]ともなし　吐月

厭ふともなく隠もなく桃の花　赱河

桃咲けりや女に似たる家の兄　萱雅

桜

年よれハ硯や拾き記されし　嵐雪
八月の分中に宿し逢桜　吏登
世の中ハ三日見ぬ間に桜かな　蓼太
なくてゆかしき散る夕桜　宜麦
花あらしや散るにつれても新桜　吐月
打寄て人目をかしむ咲桜　虚舟
爰迄ハつゐれて花に絶て見る　雪峨
能く緑の余りして見る桜かな　人左
さくら咲いて咲日のちる光し　完来
迷うても桜さかれは山路かな　大方
桜あるや人の方に遠き鼓かな　荘丹

三月に白き衣の干されけり　川巴
夕はれは咲く夜の花を桜人　等躬
おきくさや年に稀なる御所桜　故 睨象
花桜もかしたる窓人の也嘲　月巣
宿立て何さう桜は月夜かな　文臣
みよしのや逢ふ人毎ハ迷ふなり　秋枠
能く寄りハ桜ちらしん山さくら　不騫
此中に誰をまつらん桜人　一議
山里や思ふまま逢さくら　出羽 投茶
白ぬのやさくらなつまる人々　祇風
植木屋に桜咲けり日かな　伊豆 官嵐

暑ともに笑えて別る桜かり　人丸

思ひ切てしろうまちうり夕桜　季吟

何為子桜みも花こそ浮きて　蓼太

きのふ見てけふもきさ山さくらかな　可圓

山さくら人をまつけて散りけり　竟平

傘にさくら咲て来やしけり　蒼茅

山桜一時に住み待らしみなとる　鬼素

静けさや桜ちるゝ時もありけれし　沙羅

入相やされハ人を散るゝ見　牛飲

咲しき日に散るはやく桜かな　梅素

ひとしきりさみしさまするほとゝまりけり　沙松

暮笠もかくるゝ川や桜散る　北魚

散る桜一枝まつる月のよる　寥松

けふみれハ先さかりかしきのふ桜　一得

来てみれは又奥ありさくら狩　蓼太

さくら見る人も見らるゝ俤の雨　洛　闌交

うき捨し女のほとりや水やちる桜　吐月

何きれゝきれの人のはま見え　秋良

咲くらさくしちるさへ寂しさ哉　雪雄

ちるやや花ある桜乃みけふらし　黒露

かり毅日も散るき花に山桜　嵐腹

夕桜色香せまりて古風かな　伏見　草阜

遊さくら牡丹は龍を合せけり　故班象

ぬぐとおもて旅ハ五月雨しらじ　有巣

志ら紙ハその出挿る山を名に　一鷺

紅葉やこゝろしのさくら　魚汶

岩ちるや砕を吹さそふ人　花足

佛心の山ハ浮ぶる桜　卯毛

ちるさくらつゝ何を戒ん　菅雅

魚鳥よさくら咲日も捨る哉　班象

志らぬ人乃打て見る山桜　午心

夕さくらおもひ増るすくなし　狐白

佛もありぬ桜も數合点　珪林

さし綱

花

花の曇隠るゝ花を咲かなや　乃軸

味噌漬と知らぬぞさくら綱　一貫

何さくらや血を出る花の山　岸雪

花さくや鉢叩くかな山法師　吏紀

成佛の檀ならん花ざかり　篆た

花の山寄とおもふて位仙人　完来

下ぶしきもの庵と住居けり　雅年

樵夫何と帰る花の歌仙　周竹

かへる日にあつまれ出たちる頃　人左

わすれ噓を絶ぬけて花の雨　沙羅

ちる色や花よりもつけき圏　両　連漪

ちるに風かろく来て吹す酒の泡　嵐雪
絲瓶の口むすて花よさかりけれ　文亭
夕影や古のもとり数比丘尼　雲峯
花の浮世百年のかなしき家　完来
花に来る二しの人の合心　六窓
菅笠や男踊なるものゝ　百里
花折て女の力ためしけり　吐月
ちるさかやちる時花のうつしき　蓼太
折らんとしつ後かんよ世一眠　月雪
生て居て死ぬる人は花の影　南瓜
花を盛し風ハ余の木をふき折　宝松

向ふ見に一つ見えて花の雲の朝　鴉成
花来して先つもちりはなのふ　虚舟
後の世も人よ見る也気さえり　象山
散るも花や弁たしたる経のゑ　珈象
去つ来るふ隠逃て咲る也　魚坟
ありかゝ散らしてよい花の肉　天府
花ふ来て蝶の羽縮く山路かな　芦洲
四十ちよ世ふ追つて莚さ夜　花明
咲先ハあてのなしれもの筆　指月
折きしと折らせて此のくれか　蓼太
山里や待ねた花にふりきれ　木蘭

山よ来て又なき峰と花白し　永光

源氏絵の松をすりこよ花の山　亘交

居りして花の気も細る桜かな　午心

照されて桜探しも猿かな　雪珊

百よ年ふて花見人ふ寄りけり　完来

花の山気の多くれいふ余りし　阿郎

花の世よあつて異なし山　故流

個るふ竹よ花の　冒屋

為かふれ妻室のりけり　兎喬

花よ咲く人の間　玉桂

全て花の都　蓼太

花の山今いふ外かさりけり　スルガ 沙鶴

おもしろき事ての吟よ　叶月

帰るとて心もなく何せ　カガ 帰風

猿がこ花よある　普成

風涼しくて花の　得魚

夕風を気の　江草

木や枝葉の上の数　好秋

何花の身　桃長

鳴行く都　文路

花よ宿て何　湾風

ちるは　正魚

春雨

春雨や咲入れたる松の雪　蓼太
春雨やまたる條とハ見りぬ佐　人左
旅人のうしやゆしさよ春の雨　蘭尼
傘さしてゝ着るも江る中雨　沙羅
春雨や世はつめて松の下栄　六窓
物うりくと叫ふ声も春の雨　丈足
春雨けん春の先ぬ風乃弦　蓼阿
宇治殿の戸の湖春や杉のよる雨　貞深耕
春雨やふりんつけて枝の音　吐月
春雨や秋八春の秋の枯盾　社月
春雨やさかりの遠り乃春　西羊

雨ひと松春の光を紋　雪
雨もふりけり春雨の浅田　旭鳥
降ちるや春雨ふむ人の形　月窓
春の人の春雨のほそしと足る　大江丸
春雨や都まで霞のかる　夢蛛
春雨や鶏の伸尾の下業　豊扇
京や雨く京を酒や春け雨　白嫁
春雨や止むとすれは萬殿　一両
春雨や鶏いのとふ竹の花く　六窓
春の雨硯ふらけての暮人　蘂た
雨乃降る日は二日ほと雨十六　八千坊

うちかへす土のゆるびや春の雨　千ん

いざふまて小枝にもふくれたる春の雨　八丈 風宜

覚て降揚て降る春の雨楽し　嘉永手

黄菖蒲も咲そめてけり春の雨　五雄

小雛もしばし春も春雨なる思ひ　梅仙

春の雨に雪ふぬる梅ちる月　ヨハリ 士朗

出湖に降りかゝる人の宙春の雨　卓扛

春雨や扇の上りかく形　蓼江

春雨も若まじく書院生業庵　秋良

春雨や雀の声ぞ棒の蕾　川コヘ 吹茶

さゝめや…首　カツサ 沾江

菜苗
菫艸

糸竹の部屋しめりも春の雨　鳴阜

春の雨やゝしもちりし降やうな　棋翠

枝々もしの庵になるや春の雨　畝六

きく苗や植て捨あるも浅き春　不騫

人めなき都もつゝみすみれ哉　蓼太

若草もまおもかねはなきりけり　月巣

見つゝつゝ見るや果なき菫かな　吐月

海の嶋や小貝の中のちりし菫　枚露

東風吹も咲けり以ちや若草　翠羽

くれなゐの根もとのしらぬ若艸かな　スヾカ 周夫

笄に花をとくちりけり若草　翠兄

茶摘

旅をみまし足えて松明消も山路かな　班象

雨止て晴さされ色たちぬ　宜麦

蓑外柏の古けき中より茎かな　僊義

人まちぬ春や秋来けつる茎　五柳

兵の蓑猶ふちりぬ古されて　仙菓

花もてよきちきさへ人もつみ摘りく　升吉

心をよそにそみ下はさまりおれ茎茶よ　完来

茶摘てひらひく折りぬ茎つゝ笠　蓼太

ゆくかしみたる茶つゝうち　故班象

町中を横にきれけり茶つむ人　松露

川ちかに眠りさえそ茶摘唄　豪山

はかなさはそれて見るゝ花茶つゝし山　一寺

舟よりも足ふくるゝしつゝし山　錦城

瀬戸の媚ひまゝつゝし可な　朱歩

今植し咲くつゝし淋の上　吐月

山里やつゝしの坂も戸口まで　年心

つゝし川枝て往来を通りけり　寥松

躑躅

船に乗て一夜織す山やつゝし　菅雅

海棠

海棠や折りまて来てはまさみし　蓼太

海棠は西る人まつかな　虚舟

いさらひふ本にたりし眠り哉　文母

海棠や見へしまて夜の淋し　吐周

海棠や雨もくるしき寝すかた　山李
海棠や咲かゝりて驚かしき　南壽
梨の咲る志られし古寺の梨子の花　完来
あくしは梨子もしらや梨しの色　風亭

梨花

藤

小坊主よ置捨けん藤の花　嵐窓
揺よ入るは雨やあかん藤の色　東雅
捜りあけて折ぬきゝ杖に添ひ　蘂太
藤さくや水田の中に維寺杖　不寒
いつ迄の花ぞ此世とふりて杖に藤　人左
呉川山も追付けるや藤の花　吐月
つゝしんで尺も藤枝しならせて　素南
明ても見る松原山に松と藤　手人
藤さへて沈むのかゝりも見る　察松
日もすらら夕しえて此花藤の花　升古
藤さくや松にも乗かゝる山　蘂舟
みしらぬを夜よりも見る藤の花　其兎
呉竹も見れしらや藤かしても藤　羽人
藤咲て首途に走り出る藤の色　スミ原　去留
行人のはしりかる藤小路の雨　山嵐扇

山吹

山ふきや黄のかけにかれて行　蘂太
山吹の花からかて浅井かな　完嵐
山吹や井堤の水に棹さし　田紘

日永

山吹や葉ちらふて枝淋し　文足

山吹や手を花折まして上より　芦舟

山吹やふる棲ものふらさし　寒松

山吹や蛙の渡る傘の上　群人

柳より日ざき長かい来ル　蘂犬

永日や消えて雨ぎこりし山　雪弟

おそかりし不二のあたりの夜かな　年ん

なかなかや旅をなる人の葉　梓美

ながき日は湖を渡る八方なりし　松似

ながき日とおもへば空の低さかな　献鷲

あさきから影をたてしける　得十

炉塞

炉塞て二日座らぬ日かな　蟹太

炉塞や月ちる宿の名残かな　完秀

一日の炉よ松風の名残かな　萬山

炉塞て夜長くなりし名残かな　秋色

炉塞や桃の枯葉を一荷ひ　絲水

行春

いつまでも春の寒さや行春し　蓼太

行春やそれも見る鷺の寒　月巣

行春や八重の花もなき雛かな　山幸

惜しみなくちるはしらへおもふ雲の果　普成

行春の人をまつ夕べ行く子　吐月

行く舟のさしのぼる春の行方かな　秀町

三月盡

菜殻とふく春の別かな　蓼太

大根も三月尽のかしこさハ　月巣

雨風の名ハ三月晦日の事　文足

行春

ゆきて見ぬ人よ見ぬ春の名残　雪蕉

ふつと娘の耳につく也春の暮　桃醉

よい連のやうにふり春立ぬ　大江丸

春惜む松や松風の色かな　窓松

行春に二娘さうや遠ざかる　生岩

ゆく春や一時に咲て花後　宜秀

行春や花の後行人あり　桂扇

ふるさとに草の後　椎馨

行春や霞に籠る舟　踏泉

ゆく春やきまらぬ風　桃流

行春や楼

三月盡

茲(?)春の別かな　蓼大

大ねよ三月盡のかくれ　月巣

南風の今八三月晦日かな　文足

夏之部標目

四月

立夏 廿一丁　更衣　白かさね 二丁　袷　青簾

若花 三丁　灌仏　一夏　幟 四丁　卯の花 五丁

郭公 六丁　麦秋 七丁　葉桜　実桜 八丁　牡丹

筍　芍薬 八丁　卯月　杜若 九丁　夏柳 十丁

閑呼鳥　茄子 十一丁　繰机　若楓 十二丁　蝙蝠 十二丁

新樹 十二丁　葵祭　葵草　花橘 十三丁　葭雀

紙帳　幮 十四丁　蚊　孑孒虫　鮓

蝸牛 十五丁　一夜鮓　木下闇 十六丁　夏野　田植

花柚 十七丁　芥子 十八丁　夏木立　蚕　羽蟻 十九丁

五月

菖蒲 十九丁　幟　ちまき　競馬 三十丁　早苗

[illegible]鏡 廿一丁　五月雨　五月闇 廿二丁　入梅　新鮓

老鶯 廿二丁　若竹　帷子　卯花　栗花

葵花 廿四丁　合歓き　翡翠　青嵐　青田

田艸取 廿五丁　扇　團扇 廿五丁　萍　百合

螢 廿六丁　夜月　夏山 廿七丁　夜杜　夏草 廿八丁

白丁花　竹植日　火取虫　簾子　三夜混交

藻乃花　照射 廿九丁

六月

氷室 廿九丁　祇園会　夕かほ 三十丁　青鬼灯　餘

昼顔 卅丁　日盛　一夜酒　凌霄　川骨

石菖　百日紅　蜀葵　霍乱　胡瓜 卅二丁

心太　葛水　あつさ 卅三丁　雲峯　竹婦人 卅四丁

簟　蝉　さゝ井 卅五丁　夕立　むし干 卅六丁

嘉定　清水 卅七丁　鵜 卅八丁　蓮　紫陽花 卅九丁

川狩　撫子　汗拭　納涼 四十丁　浴後

發句類聚　夏部

青櫺盧了輔編輯
八朶園寥松删定

四月

立夏

夏ころもきれは世の中何ぞ有　了浦

ついそこへ一日の都も夏になり　寥松

更衣

法の舟裏をかへし見し出るもの　嵐雪

かさねを惜しと思ふ夏衣　吏登

橋ひとつ川わたりて宿る夏衣　蓼太

那ぬれ女よもやしまひも一へ　連太

見ぬくは様も去し夏衣　完来

一日のなれにこそあきにかへ　普成

お女乃せゝさうりやこゝろも之　魚汶
橘に向ふ衣かん更衣　正毋
はなちるてきちゞやたゝん衣之　楚水
はらゝなるまむかなし。更衣　冨屋
更衣おとしも生て居て添し　柿紫
花見ふりく向ひんころも之　吐月
圏雨をえてかりまや更衣　李芳
行里ゟもの姑つゝころも之　梧泉
慶月の衣之うき女に那　巴人
更衣る上中しく　嚧　以生　洛梅
ころもへ心ふあらゝかゝし　月哉

白重

呉服屋に盃ありけり更衣　一瓢
古袷もゝ之二月に心ゝくに那　京花
膝ぬきさや杖ふめて舊ゟの忘　月喬
ゆきあり素跣も寒し更衣　兔嵐
袷ます倩ゟ嶌し白ぞ降　嵐雪
白かさねふくきぞ卒中にもの云ん　蕪た
姑のふたゝおやちるらん家ぞ　杉風
多分親の袂に入ぬ衣ゝさね　秋梓
眉根ゟく鏡ゟ扇やしらぞ　渭魚
はふなかれをきぬゝ人まれ衣更　射阜
鴉無く能来袷られと袷の前　嵐雪

袷

青簾

うら帰の先ゆつゝぬ袷かな　時中

手枕の十ヲ折りる袷の那　寥松

袷着てかろき浮世と思ひけり　関牛

いさゝかよき事上は人の袷かな　虫尾

男より先へ着たあとも袷かな　鳳足

墓掃に来たる人よりよく袷かな　月巣

袷着て先を流すむかしかな　起翠

一日は揃ひふたるあたせば　吐月

五位の位をこき交よ着るかな　嵐雪

所さきを無のはめ七ツまきれ　蓼太

花あけて夜花咲しきかな　菊平

苔花

済月は清ておかる苔すまれ　和水

あの堀る舟てうまし苔の露　桂露

弦合のうしろは涼し苔の道　得魚

かきてよる京にもしほ苔の戸　吐月

笑うしたつやさやこれは苔の門　月巣

揚に八重たぬ風行の苔す穂　下サ　飛撫

急彩の簾兔えうる苔の戸　普成

何とは家は京よ似えける苔の戸　吐月

無からふ精の胡雪や苔は花　蓼太

松か根に打れて白しこけの色　人左

日を秋の上をからん苔の花　一貫

灌佛

何うて咲ても淋し二月の宮　吐月

向きの指よくりてや菩提花　眠我

灌佛や廿日はもう一夜庵も咲り　吏登

灌仏やりふ葉にする柳かけ　蓼太

天竺もうき耳に仏の寿命かし　完来

翌捨る家先は川お花御堂　吐月

栴檀のふた葉の匂ひや佛生會　四明

灌とふく折つかりん花御堂　秋鬼

佛また一度に濁る甘露ふ那　六窓

灌仏や見えも世くみぬ生佛　蓼主

[illegible]　蓼太

一夏

丈六も見るお花御堂　吐月

おしくも生れ継つる仏の家　加賀　淺川

安晴も夏彩日和に花御堂　栖鮭

路抱も別るゝ朧し夏百日　蓼太

夏籠や忘て媚み怨まれ　宜麦

日を川て夏中の杂饌かぞへ哉　完来

夏籠の人に寿ふ日数ら菊　午心

石も秘て夏去は破下　雪珊

下ヶ髪のやろ只せたる夏かな　銀耳

夏籠や見まえ入る術の究　嵐齋

条夜も折お男は夏書ら那　吐月

松魚

夜ハ猶や聞しまアけ鯨の京　嵐堂
裏門ハ日暮も若葉滴る南　鬼丸
大勢は中く一むかつをかな　嵐雪
無ハ流れに鳴くを取せ初松魚　吏登
両家の妻あらき宵や大川鰹　蓼太
人中を揺りつゝ初松魚　吐月
百日の鯉も一時の松魚かな　鳳宿
寿命のみうとうはれて鰹かな　大丰
魚ある勢脱して大川松魚　如水
幸浜や松よりぞ遣る初鰹　和文
先たはなしは鯨すら飛ぬる初松魚　蓼太

鍋ちらし蓼久しきかつをかな　錦洞
口上の貌うつるゝ初松魚　月守
江戸もはふ一筋道や大川鰹　荼嵐
潮先を今ハ八まうに大川不　秋杵
旅好の春て縁さきや初松魚　吐月
各列のゑに呼出松魚この那　黍太
取りし其の講釈繰す鰹かな　文足
窮屈に鰹を売る世の中に　百里
さすか都いまた鰹をもてあそばれ　二梯
人よりあるハ蔵ふ渡りし初大川不　蓼太
まつ大川の松の葉とり縁りかな　窓松

卯花

いまさらに卯の色垣乃ほころびけり　完来

卯の花に来れば翁の袖ぞ似る　雲峰

うれしさや京女房乃つくらふ笠　魚観

卯の色やくらさ八文杵の音　友蘭

初瀬泉の声に卯の花暮る山路かな　人左

郭公

川越の月の松にせんほととぎす　嵐雪

人机に老の巨燵やほととぎす　吏登

見ぬ恋をこころに聞くや時鳥　蓼太

蛍火を啼すぎるやほととぎす　完来

鳴けば聴く雲井の子規　晴里

郭公来の声も田にある郡　物我

ほととぎす水より白し月の影　吐月

卯月まで待つやたのむ子規　月巣

不如帰声より深き楼の松　蓼秋

吉野山や花の比よりほととぎす　阿人

時鳥若葉の匂ひ吹くよしるし　年心

京に来て初音を聞くや郭公　秋良

激しさへ谷へ入らんほととぎす　婆心

涙おさへ人まちかねて郭公　寥松

暁の星晴もよしほととぎす　黒露

時鳥闇を離れて出でける也　蓼太

なかなかに寺の初音を惜しみけり　樗良

夜もすがら空の白ひやほとゝぎす　月巣

時鳥声きて傘試み上りけり　吐月

濡て来る後薬の船やほとゝぎす　蒲丈

子規鳴やたちまち九日草　白麻

山行の甲斐あり花にほとゝぎす　蓼阿

時鳥鋏下に寄るばかりけり
江尻
雪道

郭公空を鳴ぬるたそかれより　得魚

鳥も月も鳴ぬる夕かれぬ降　河翠

見るゝ人鳴けれ暑もをかしほとゝぎす　蓼太

薄雀み嵐の中やほとゝぎす
故
斑象

杜宇布かゝし濡るゝ果ほとゝぎす　宜学

さゝ啼の径もはなほとゝぎす　方壺

西はまた爾ひとへ不如帰　蓼主

桜桑つむ里の明りやほとゝぎす
メルカ
峨月

郭公空もとらへても都かな　完舟

忘る人を知ると宮井の時鳥　懲心

卒塔婆の杖おし拭てほとゝぎす　百里

常盤木の中も空やなりほとゝぎす　山幸

時鳥見て嵐を追ふ枝の部　子交

来たの月は忘れよ来川時鳥　素迪

面白ぬまつ夜の雨あかれ郭公　蓼太

郭公鳴ぬ皐月の油皿　了輔

麦秋

鷺森してありや麦ふしも秋の花　蓼太

麦秋に移ろふ空を通りけり　石雄

むき秋や崩に菜乃か残りけり　得恵

あをかりし麦京あかる麦畑　氷花

被麦や嬉しき菜の白ふ山路かな　馬家

色合ぬ世をわすれてふ探麦　蓼太

出女や是色をハ麦の秋　吐月

葉桜

葉桜や忘れぬ人のをとかまり　故 琊気

紫さかりの頃を待らんを一枝　子浦

葉桜と成りて何しか日和かな　士峰

葉さくらに寛字桜に行くかな　芦洲

実桜

実さくらや枝わかしき寺の山　蓼太

実さくらや粒なれ葉の紫　吐月

牡丹

あれ庭に有りたるほたんかな　嵐雪

為ちさかりして居る株によみんかな　蓼太

牡丹散て打かさなりぬ二三片　蕪村

日は午の古鋪の牡丹かな　大江丸

ちりかゝれもさかる牡丹かな　武秀

墓あれてやる車かり夕牡丹　尺蒲

ぽっかりと咲て残る白き牡丹かな　蕢雅

牡丹咲てせハしき客の来訪かな　踏可

採ませて又一りんの牡丹かな　吐月

心なきの身もゆりまへるほたんかな　蓼太

此頃の日も隠されぬからんも菊　吐月

あふみまうき色の四月は牡丹かな　嵜味

植て見る草ハ雅了牡丹かな　涼松

此庭や人ある門めくるかんな　大江丸

かゝる姿きてなやめる屋の牡丹かな　青鳥

春風の武日なとるほたんかな　五柏

さのみなふ淺研きや白牡丹　考貞

淺やら捨て咲たり牡丹かな　沙羅

百草に戯れしてかんかな　淑意

笋

竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪

笋や家のかゝやく朝の門　蓼太

たけの子や傘持添て縄さし　沙羽

竹乃子の折よ花も朔月哉　吐月

芍薬

芍薬や今まで隣日まきまし　米汁

卯月

娘麻もみて米ふみたる卯月かな　文厚

卯月哉や餅を尚ともよい柴　棄松

鶯をも果ぬる向く卯月かな　素迪

芽を刈て四月もまのゝ高うかな　山松

松風の耳すまさるゝ卯月かな　巨海

杜若

人くの扇かこしかきつはた　蓼太

傘ふ下ゑ見てりきつ川ちる　吐月

紫もんありて婦きり杜若　年心

はなれ来る小やかきつはた　桂花

今う咲を待く代そんうきつ川ちる　（カゲ川）史鳥

旅人を旅路おいて杜若　（スンプ）郎娥

杜若ある堀を念ハおつのりけり　落笠

かきつばた山家を箸み咲ける　粟松

田の破る吾も嫁まぜりきつはた　雪舸

ぬま辺ゑみ上がりかきつばた　不髪

事もせて旅もけり菖蒲かな　葉平

旅しつぎみもつくし杜若　祥廷

橋杖ハ伽藍に杵くる杜若　大睦

あちも札切て打行りきつちる　呂衣

あき家と年隠る乃きつ川はる　婦丈

あちれ今日隠しかきつばた　雖象

杜若男は挿てもみきれず　文錦

流れの底ま来てりきつはる　南来

茶室たぎんりくかきつばた　大魯

杜若橋をさいて咲いてた　藻太

かきつたく傘さして切もなり　一江

香傳女十茎と挿むる咲ける　年心

よしの川ゆかりし杜若や菖蒲かな　凌売

夏柳

何となく枝風ちるゝ柳かな　菓太

枝と地につゐて動くや夜柳　枝斎

紫柳や芦の隣りん板木橋　三酉

閑呼鳥

翁は葉てまださゝて閑古鳥　萩之太

呼子鳥またも線藤しりや　信中 柳荘

梢より上に家あるかんこどり　翠羽

人丈の薬りも呼ぶ呼子鳥　一如雲

つまりしよ出家したるかんこ鳥　吐月

若楮八先ほくむ紫し閑呼鳥　牧之

夕暮る夜に移る景呼子鳥　不騫

よ呼て一里舟着る呼子鳥　兀兎

峰から夜の何かとやかんこどり　言慶

梢から家来て人なし呼子鳥　探梅

呼子鳥呼ぶ呼ぶ声に川柔　月渠

竹もし木もしひとり閑呼鳥　菓太

西や二羽なく里は呼子鳥　好牛

呼隣る目にあかりけり呼子鳥　舟古

茄子

一籠は似たくらなしや初茄子　蕪右

三つなりて三人の客や大川茄子　蒼山

紅藤子似たり茄子の一枝漬　青年

ちいさきも又遊河の大川茄子　吐月

短夜

きつ茨子や鵜味噌桶の花ちるとも　左株

京くるゝ稗子かられ加茂の子　吐月

まだ星もみじか夜明るとはしらず　不騫

人音の寄時夜の短かさ　蓼太

みじか夜や何時しらしも杜若　沙羅

短夜や雲晴る明たる也　也有

ほとゝぎす短夜一夜あかず　柳葉

みじか夜や嫗く這入る日の影　披雲

短夜に横たへしり瓶紫琴　荘丹

みじか夜は若葉きらめく露の　一山

短夜や燭の閉　円運

みじか夜や五条ハ雁も起もせし　吐月

短夜は鴨さわぐし嵐涼　永老

まつの夜も月は明りぬ　業兆

みじか夜の柩の素を枕のこ　朱鷺

後の夜の先まゝ丹波墓とと　霰子耔

若楓

淋しさに雲しまいなし若楓　青牛

若楓柳見みを世とある　鈴雪

奈良の秋より若しし若楓　吐月

蝙蝠

かはほりやむかし京の扇　蓼太

蝙蝠や遊女の灯とく隅霧寺　馬勃

新樹

星の灯をとぼして若葉より　菊奓太

青ちかく芭蕉に露よ細かなり　蓼太

今穂出れ見え来ぬくも芭蕉かな　吐月

枕とる雨の音背残る芭蕉かな　完来

裏なりて折くなき芭蕉かな　沙羅

月をうけて濡色深き芭蕉かな　古行

新しう雨待つ宵の芭蕉かな　路象

嵐うち濡色かしく芭蕉かな　月丸

何事も老たるぞ見えぬ芭蕉かな　都布

傘のちいさく見ゆる芭蕉の葉　巣兆

かけ笠はつれよ宿る芭蕉かな　寉松

神風をむかふ芭蕉かな　蓼州

蓼太

盧橘

名所や花の香や蓼太の五六月　蓼太

何事と問ふ橘の匂ふ哉　用巣

鳥橘やたち住む窓の妻　西雅

昔ちるむかしの月の匂ひ哉　五秀

月堂

葭雀

隠もすらるお葭よぎれり行々子　蓼太

宵いれも淋しきかや行々子　洛梅

薩くらふあかしかましき　宜麦

ゆらぐ遠き声かりけり行々子　文足

晴日くる柳とろあかれけり行々子　何香

雷かきましくやかましく　其流

上サ

紙帳

よきりやかけしくれて何方の滴　麥ノ太

葉密に知らで居ぬる紙帳かな　今

小人閑居して蹈破る紙帳の邪　月守

酒料にしてうす汚き紙帳かな　柳繁

ねまり淋き夢をゆる紙帳かな　逸巣

貧ならしうきものよる紙帳かな　吐月

去年を置て心のさしく紙帳か邪　班家

何ら人のおきこなるたる紙帳は　橘爾

我庵は紙帳か世て寝るよや　蘂左

紙帳や布帳の白への取らし　古句　蔦記

蚊のかやかや邪ふれて付てある　故之

夏虫

蚊幮

かれ葉の蚊のはなる滴し角田川　鶴松

ほうむりや桂の上にて蚊が月　吐月

陣笠に子文湧て寒さの蚊かな　橘叟

待ありやむかしハ汝が身にして　七　堞勇

身にかへつる深ききよき幮の四隅かな　麥太

おもしろ幮を人の深山ヶ邪　完来

旅の蚊屋似しみの上を流りける　宜風

蚊屋つりしとき一おもう夜のおと　ト六

揉んでや幮につくる暮もなし　吐月

蚊屋の月思ふくも瀬めける　年ん

とりしや浮世の外をかやの月　助章

蝿

みよし野に蚊屋せつれて蝿払　年心

窓立て蝿追出す月夜かな　蓼太

つきとかは思ひし蝿の夜の春川哉　沾吏

極楽は四角なりけり蝿のもち　吐月

都まで飯粒蝿をはらくりに　嵐雪

蝿ともちや子どもなれ又蝿もなし　百春

かりかりもなにしきりには

いつしかに上手になりぬ蝿打　蓼太

濡て程蓑なさけやる乃蝿　善成

力なき蓑やひろへん都の蝿　羽翠兄

蝿追や風なきけふ棒の上　戯言

蝸牛

蝿うちや抱れて蝿のとかりけり　長楷

雨の蝿峠て蝿おし蝿たたき　歌白

蝿みくし心のさきを立まはる　曉臺

蝿たたきなある影のひとつら　枝月

一つ蝿ももらへて夜なし蝿たたき　郷音義

あの蝸殻蝿をそろへ　其馨

志ら露や角は日かぞへ　嵐雪

あはいと忘られぬよし蝸牛　蓼太

夕立を避て這ふて蝸牛　我堂

見ひつ我方丈やかたつぶり　連夫

掬ひよりけり葉末の蝸牛　大江丸

一夜部

一日は夜もちて入ぬれるらん姿り　斗南

玉ふる川さいて逆し蝸牛　恕曲

かゝつゆ石にみだるゝ声遠き　氷花

我ために杖まつる這ひ行蝸牛　青牛

心みな翅もあらんかしらつぶり　午心

花盛ちとこ扇れて淋し蝸牛　折義

いとゞ夜と定めなきいろいろん鍋の腹　蓼太

鍋のしたにたくやかゝる心の都　以舟

源助餅譲迄も長し夜様に　汐翁

いと夜餅すましと郷まで恨みけれ　月麦

いさらぎき餅ともいもん一夜餅　於白

餅の臺かろきも母にまかせけり　秋長

蓼に斎足せて長し餅一夜　蓼太

木下闇

下つゆや地虫ありける蝶の斜　嵐雪

下つゆに鏡見ぬ闇似の宗[illegible]　蓼太

昼顔生ひおほせ木下闇　天馬

下つゆや里より暗く枠乃声　千友

あたまにあたりぬるや木下やみ　豪山

おそろしい大の楼さしや木下つゆ　少言

川よりは試みに何の夏野原　完来

夏野

田うへ

松[illegible]おとうたび出ける田植かな　蓼太

田うへ笠嫁ぞ揃子[illegible]　大江丸

虹たつ帯に花里小みちの田植かな　不騫

植そめて降るぬ月はちき田へ入かゝ　蓼阿

うろたへ岩ふくのちさき田植この部　花兄

行よしみ沐し滞ん子苗かな　洗耳

体ふ附る左近つきの男ゑへかゝ　月巣

早乙女の植さやうしいろ川松　吐月

母の顔ゆゑかしくと田うへくこの哉　曲肱

飛ふ町早乙女をまねる気色かゝ　月居

夕ア(は)田植ねさしとうたふこと　孤白

夜は雨さてもかは田うへくこの部　諸九

田へ見山のつくらしなくて　嵐堂

山陰や人同おもて田植唄　蓼太

植うゝも八本に松ゆ苗かな　完来

浣舎の御前も行く田植ぞ　菅雅

玉苗やうち子二日月　梅仙

早乙女やゝ方でれ座をぬけ了け　六窓

芽くんとすれは勤しや田うへ笠　吐月

一二枚有明踊て田植の木　三鴿

雨ほゝ田植る男何もちれし　漢水

いとも手際よし田植の夕嵐　カ子 可一

早乙女やいまゝあき水は本　梅除

今の松植後しける門田ぞ　筑前 計圭

梔子

[illegible] — 蓼太

[illegible] — 午心

[illegible] — 六窓

[illegible] — 蓼太

[illegible]の花 — 鬼秀

[illegible] — 大江丸

[illegible] — 郎娥

[illegible]の花 — 渡舟

[illegible]の花 — 白麻

[illegible] — 吐月

[illegible] — 寥松

花柚

五百代や[illegible] — 佐國

[illegible] — 蓼太

[illegible] — 一兆

傘さした人の[illegible]田植かな — 班象

早乙女や[illegible] — 東滄

[illegible] — 一鳳

[illegible] — 寥松

[illegible]花柚かな — 蓼太

[illegible] — 一得

[illegible] — 阿人

志ら菊に積てもちまた月夜かな　蓼太

ちるとはちらけしき涼しの花　李童

咲てみれて何思ひ見けしみな花　月巣

鎌倉や嵐のあとのしけしのちる　青牛

詹や雨のあとに遊ぶのあと　巣兆

夏木立

雉子も見ゆる声や夏木立　蓼太

人影もさゝけ涼しや夏木立　衍庭

体をも一つしゝやあつてゐる　吹月

ひいるあふさひもせんる夏木立　文臺

螢

こんにまた所ひ飛ぶや人のつかる　嵐雪

寄る波に沈む螢の行衛かな

旅籠にて螢のさきく紙帳かな　岱峯

うつ槇や螢ふるひる川しも紅　梧泉

如きや女と人の見ひとる川　志碩

湯浴みに咲や夕の螢のかな　恒丸

宴の夜のちかみ笑る羽蟻かな　吐月

羽蟻

旅人のきつさせて寧る羽蟻かな　文峨

了輔

五月

志ら庵の垣根しかる菖蒲かな　嵐雪

菖蒲

玉水の何やかや葺ける菖蒲かな　蓼太

世の中の庵かつ葺ける菖蒲や花　宗瓦

幟

一刀ぐせんはやきんの九節　花雪

ちよ代をきつ待へておや気には　吐月

桂さぬけし菰へきはやめのち　遠舟

のむりを都へまきをけるとは　蓼太

門松の岡まてもを雛幟は南　[illegible]

備りあるけりとる西の幟りは　[illegible]

花無りとちきもある兜には　蓼太

まつ風太刀えんやあるり相部　子心

百煉鏡

ちよのき

煉りけち清くえれすみり月　[illegible]

升もあくは上もなし粽立把　嵐雪

[illegible]

競馬

まくれとも上戸もてあひちまきは　六[illegible]

ちまき結ふ[illegible]　梧泉

汁に煮て粽をも結ぶ[illegible]　月守

[illegible]　天府

粽結ふ[illegible]十把指　五柏

[illegible]の粽は　吐月

手代旅の粽汁も[illegible]粽　了輔

[illegible]日高や生粽　嵐雪

[illegible]　蓼太

[illegible]心[illegible]　得魚

[illegible]利[illegible]　月巣

蚊遣

赤々と旭にむかふ蚊遣かな　斑象

毛の色やとるの鏡に入宝に　氷花

おもはくは男ゆゑやふしくゆる　砂月

二三盞はねも淋しくゆる　了浦

蚊やりさや暮て女は石をたく　嵐雪

蚊遣火は中に流るゝ椿の葉　不騫

隠家のそれと知るゝ蚊遣かな　蓼太

少離の蔓遠ざかる蚊遣かな　雨翠

加茂川は月見てひらく蚊遣かな　普山

咲く旅人遠く見て蚊遣りの香　婆心

蚊やりから淋しさまさる深山哉　百里

五月雨

蚊やりして涼みの里は月夜かな　蓼太

世は大ぞらもしれるはまで蚊遣かな　居逸

月の留守は煙にて蚊遣の行米家　月巣

待宵の先づ奢つまり蚊やりかな　吐月

小口の戸を打叩く蚊やりかな　静山

おもひきやひとり八紀る蚊遣かな　六窓

都つゝ待よ蚊遣てけり蚊遣かな　荘丹

月代は都の東蚊やりかな　蓼太

五月雨や蚊帳の徹す沼の底　嵐雪

紀よし捕まあつまる鳥が日ぐれ　吏登

五月雨や泥ある森に松か月　蓼太

五月雨や軽くものいふ隣あり　吐月

さみだれやいふも心にかゝる縁　椎香

五月雨や一雫ふつゝる流れ松　秋良

さいうしと子の住くらぶしが有る　兼心

夕暮のさらさらとよ五月雨　完来

五月雨きれふもくもるこの行　河露

五月雨や断雲ふた夜棟の松　柳荘

五月雨や淳本を出て蛇のこゑ　氷壺

さみだれや浮絶の間はきしるる　風馬

五月雨や田中に動く人涼し　蕉左

さらくと鷺刈る人や流れ草　寥雲

五月雨や田の中に汐満しら　不騫

さみだれや遠近篠の水まさり　逸賀

五月雨や思ひよらさる宵の雪　夜兎

さみだれと成て青き日影かな　玉宇

五月雨の雲の中より似てる　雪篁

五月雨や鴨の居ちかる梓の音　素奴

五月雨やかゝる中にも日和狐　栖絮

深林に流れも寄の五月雨　吐月

五月雨や小笠晴れる峰の上　暁鵞

ひきつゝけて後の五月雨二三日　畋牛

飛ながら千鳥ぞ見し五月雨　沙四雉

皐月闇

水雞

さみたれやふみかくしてハさくり松　普成

さ月雨にはれ月まつやまし舟ふね　蓼太

[illegible]のちかきあつらぬさ月雨　完来

さ月雨やおしぬもおハ漆まて　蜻羽

指を折りしさ月あめくるしの術　夫水

傘に押つけ来るさ月闇　千布

子を呼ぶ猫となきけり五月闇　吏登

八橋や向ひ咲し八つの花　完渠

菰草の深ハ音さかり水雞かな　蓼太

[illegible]と巳に[illegible]水雞　完来

[illegible]の[illegible]水雞　文栄古

あつくと水雞のこゑ月おぼろ　吐月

[illegible]室やおりく水雞　如璞

月の裏ありてたゝく水雞かな　頓吾

木母寺を[illegible]水雞かな　蓼太

老鶯

うくひすや巳に月日老を[illegible]　普成

鶯や老を忘れは[illegible]　玉桂

[illegible]　蓼太

若竹

[illegible]竹　文足

竹[illegible]　得魚

闇を今の[illegible]　月皐

[illegible]竹　班象

帷子

松を出る風そこへ入りかたびら　吐月

里川や水の中ゆく手作　寥松

かたびらや仕立るときの帽子　吐月

惜まれし帷子は何の助かな　氷花

紗綾の茉莉にも似合ふ白縮　白麻

みどり子も汚してゐる辻が花　千心

[illegible]して[illegible]辻が花　舛古

紅花

都まで出てある人もそれの色　吐月

唐にもくれなゐ[illegible]　松隣

男にはつまむともなし紅の花　石漱

栗花

[illegible]の色にや栗の花　信中 玉芝

萱花 合歓花

手にとれば[illegible]の[illegible]や[illegible]の花　完我

夜の中の夜もあかるやねぶの花　蓼太

[illegible]ちゞまる[illegible]　大廿八 萬淳

翡翠

今は[illegible]泊まる[illegible]　山松

川やゝ[illegible]風[illegible]　蓼太

かはせみや涼しい[illegible]　吐月

青嵐

川蝉や[illegible]磯削松　完来

[illegible]一窓向や苗[illegible]　嵐雪

荒磯や月も[illegible]　蓼太

[illegible]荒[illegible]　吐月

[illegible]　[illegible] 百州

青田

さゞ波ハ何やらたえし刻よし　嵐雪

二タ色の青田の中の青田かな　六窓

天地の際さへも見えず青田かな　古笠

むかし起の田を守る青田かな　湯僊

萬代の水より青き青田かな　茶堂

傘さして何ぞ見ゆるの青田かな　了浦

秋の実るたのむ田ハ青田かな　墨水

団扇　扇

触ても扇の何しる部　蓼太

衣手の扇の何し扇かな　吐月

夕立の後の世に見る扇かな　晴窓

物語ゞ扇の風の通ひけり　梧泉

おもしろの雨の鷹の扇かな　老鳥

いとけなき手にも扇かな　蓼太

白扇 蓼 撰て見しかな　世碑

我ながら何にしても扇かな　長梧

去りし此二本さし扇かな　鵜斎

天地の中にあふ扇かな　女 冬琴

給はりしと聞えて扇かな　鬼守

やがて見えて扇かな　寥松

植つけの田つゞき団扇かな　蓼太

團扇

撰しき　吐月 子眞

みどり子のよい扇かな　吐月

萍
百合

まつしき月にかくれてしらゆり　花明

鯉多よ流ふかめとも団扇かな　故 班象

向ふきし俤の義之にかくれけり　大江丸

うき草の鏁くや風の月　三鵠

萍や漂ひなれて余所にし　起石

山中や若しき垣る秋の山所　蓼太

姫百合や葉隠れ見えぬ風まつり　連牛

すきまより宿秋の百合咲にけり　午心

赤百合や昭明て居る里乃精　寥松

百合松城に百合の花さく山路かな　郎娥

山ちかや葉末の中に申けなれ　鷺雪

ほたる

山伏の常に通ひやのりかかる　節向

追はれては月に隠るゝほたるかな　蓼太

独く来て松本に蛍淋しつゝ　山幸

紀の川来て庭の露に蛍哉　其禮

さゝきまに何ゝ入んて蛍の飛　貢雨

されされ蛍の蝶くさしよ船の傾　寥松

みよりては蛍に流るゝほたるかな　文足

切先のさかるゝもれ蛍の夢　月巣

ちぎれ飛しみたすに透通る蛍かな　吐月

雨せよと蛍飛ぶ栽か天の河　故 班象

柳葉に露吹く風あまりた　好秋

夏月

うしろから猫ちよと大に蛍かな　蓼太

蛍火や是八土瑠のまくらもと　班象

吾も附蝿まで蛍の郷　吐月

蛍飛んで葉のまさかの風情かな　蝶羅

葛の葉のうらおもてや飛ぶ蛍　普成

かげろふの桁も見えけり飛ぶ蛍　完来

盛る八月よりも凄し飛蛍　雪武

出ぬと便り雲八なつとぞ飛蛍　崇義

妙山より多けものこる夏の月　蓼太

人通き春の弁姓役たや夏の月　荘丹

撫くよ深の新木や夏の月　浅林

哭いて居る中も出るや夏の月　山幸

夏は月寝りも無くなりぬ(スルカ)　茶童

迷ひ子は知人出る夜の月(今)　菊二

夏の月よい宿とりて捺されけり　普成

橋を銭せず柳の新や夏の月　班象

みよし子はよき知てもる夜の月　完来

馬厨の戸がほ籠く夜川の月　一貫

あふなし出る橋ありて夏は月(サツテ)　斗水

夏の月船のたぐひは流れけり　寥松

おもしろき篝深かや夏の月　呉春

きよみ原厠深かや奈川の月　大江丸

夜山

住居登てる〳〵船あり夜半月　普成
乞しかくし雪の〳〵と宗川乃月　南養
湯雨戸探るしうと夜半月　幸橋
夜の月串に鍛され残る〳〵　下サ　魚房
口近るむかしみ直や夜の月　大江丸
夜山や旅人あくハ夜も明し　吐月
夏山や払きおみ下生滋斜り　咸里
夜山は雲も落は夜の山　歩月
螢りてハ風に向ふ夜半山　一草
夜山や星に椙ちる青まくり　人左

夏野

夜艸

夜の蝉や引きを違ふてるか息　枝直
擢夜村や灯のともりける夜半かな　月九
夜草や下ふ湯ぐさるまし　吏一
夜草手足ふ流て稀きくふ　吐月
秋近き草の香やし蔵つき　一雨
来る草や梅をてある蝶扇　蓼太
夜草や井みも汐さり家二ッ　寥松

白丁花

西北の行ちく眺し白丁花　班象

竹植日

竹植て千代の友と通ひ竹　可□

火取虫

火とぼしこ夜をとりて惜まる　茶笠
人の気をとまりて火とぼし　如圭

茄子

茄の子は淋しき影を分くれども　吐月

身をさらに日をさけて行をいふもの　大江丸

焼心の手につく夜は名もなし　貞松

まかせを影抱影や日傘　石意

三夏混交

大仏や人は眠き五六月　吏登

その婦の旅立淋し夜相打　完来

夜涼し飯くふる音は拍　青牛

六月や中に飯色の一夜晴　寥松

夜の旅起臥を月はおもしろき　菅雅

藤の宿

藤の花は候もかくかの中なる　蓼太

照射

藤の古やかれあふて藤の古さ州　雪萬

弓杖に寄よる鹿の照射かな　嵐雪

祐成が仮る狩衣世のよかし　蓼太

時致鼻山ふと別て照射かな　全

嘘の事に照射ゆる大串に鳴　蘭更

荻茶を消されて座るよかし　蓼太

照射山陰よりうけて狩りかな　一兆

火串入ても抱くらん松の宿　午心

草結ふまて忘る文や照射　寥松

火の力添る高砂のかゝし山　嵐舟

古佐な画の夜しおさまりし　蓼主

六月

氷室

六月も桜は志るや氷室守　蓼太
加賀屋の梅売りつき氷室守　老鳥
とし〳〵に水になりけり氷の貢　班象
京の錦染めつゝ氷の貢　深松
夏川水悲しき梅は寒の雨　青牛
氷乃貢河つきし清き日なり里　午心
夏氷日は照りての心地よき　翠兄
三寸の氷にをとし富士は雪　蓼太
六月乃駿河ハ雪の都かな　月臯

祇園會

立明もよりて踊るや祇園の會　嵐雪
祇園会や京八日傘は下さけり　蓼太
来る年にてらへあれまて鉾の兒　大江丸
祇園会を見ても郡代今は京　吐月
揉ぬ顔の鉾もつゝしや鉾の兒　豪山
雨鉾やけふの絵乃まつる　氷花

夕顔

夕顔や儒をきける鼓屋の桶　天府
中〳〵顔や空也の門の瓢提　蓼太
夕顔や浴をとさす戸一枚　午心
夕顔に欠てさほしき月夜かな　春鳥
中々の顔や待人持て咲いてき　班象
夕顔や二布かけしも垣の花　寥松

青鬼灯

鮓

夕されや出るま宮なる池の上　蓼太

両はし夕顔のさかりかりけり　完来

夕立の後や軒ふなやしみ玉笋　三上

虫の声や今ゝに白露を踏あらん　大江丸

夕顔や又ふ中て小さりつお　素潮

家ゑや日もすられぬ青鬼灯　嵐雪

ひとつきや此ゑのさまもまよう　吐月

鮓くもの價をとりて去りけり　六窓

夕暮る網よりとる小鮓かな　蓼太

打水ふ浪越す鮓の桶の水　歓丈

鮓くりや去るお客人の中　蜀杠

夕顔

夕顔や鳴て咲て錦をかけり　蓼太

ゆふかほや何ゆへめり也捨碇　巴明

ゆふ顔の夫となき影もし水　鳴皐

夕されや雲は籬にゆふかほ　吐江

ひるかほや錦をうてあやしかれん　周巣

夕顔や百姓後し開けり　青牛

ゆふかほや出る娘ふかる何　吐月

ひる顔やほし桜白ふ伏家ふ　牛毛

晒

みるみる子は墨るいつまし晒布　蓼太

ちふちふ又一巻の晒はさらし水　夏来

秋近き月影に布ぬさらし川　女 菫路

一夜酒
淺雪
川骨
石菖
百日紅
冨士詣

涼しさも夏に夜なかける眠りかな　蓼太
明ちれを人て遣りん一夜酒　全月
淺雪や山家はまき月の豊　吐月
淺雪や日のさされ峰高けれ　完来
川骨やさゝきおもへ流るゝ果　吐月
石菖に海山繁る住居かな　貫嵐
蝸牛菖蒲に新の露や百日紅　完来
手折りてや露の深紅や不二詣　蓼太
うき雲の心ハ捨し冨士詣　不騖
暮けりハさゝふ二条山修行　台窓
あまりくらし宝樓にさしあしよらして　丈水

土用干

藤子城の何由しや冨士まうで　完来
何もまうと冨士へ入てまうる日か橋　秋杵
六月や雪何れハ本社不二詣　吐月
思ふるも我一日ハ冨士詣　午心
人の身ハ浅くもいうる冨士詣　蕉住
はしたなる風も新れかけ土用干　蓼太
峰ふ新しく何とあらかけて土用干　鳳足
松原や風をむきしてやら土　六河
児の手ハ何まうも土用干　嵐雪
我もとも衣も風の涼しうまて　蘂た
風の皮にかまき何原かな　完之

胡瓜

心太

葛水

瓜喰ふ人や月松の出すまもなし　幸亭

君すゝむ世話へと姥瓜まくさし　写徳

風きゝて西信子書や人たち　梅素

気残むて水より涼しところてん　菜丸

月まくら枕も月に夜捨人たち　察松

夜ふ寒ね浅茅のうの心太　真松

手中やる乃不ところてん　萬記

人たち海へもとさん涼しへし　吐月

葛水や手あかしまる氷乃内　五三

葛水や独りぬくみまてるみ　六栞

葛水にうけし作り仕の杖けり　十月

暑

柳見へ渡る船の星この雅　虫登

此路の蝶まへ思きあつさ哉　蓼太

いつくれは西なき里のあつさかな　至丸

葉かくれに夕る桁に星の雅　菫巴

暑くや日影もつよの星に　月守

旅の葉生て不何寄て早上松子陰　班象

硯箱に出は多きあつさかな　完来

水たゝきし矢網の橋のまこの前　蓼助

紫女瀬を結ひとつくる星かな　左席

風山の雲のかゝりてあつさかな　普成

三たひろへ三段森よりその軒　子真

雲峰

おもたのれふとりてさするかつさかな　嵐雪
よろしくとまかれ小鰭の雲の峰　吐月
[illegible]の[illegible]も寄り船の行川さんかし　一巣
大津画小舟のよする雲の峰　蓼太
役人のよるほひに見る雲の那　採魚
蕎麦の峰[illegible]雲の峰　之求
雲より吐[illegible]ひきし[illegible]紫　可笑
川浪にかこつぬ船の雲の峰　百里
寄る方も子もあり家の雲の峰　米之
かる[illegible]と川[illegible]雲の峰　求光
[illegible]雲の峰　蓼太
[illegible]雲の峰　虚舟
うらつ海を[illegible]雲の峰　千町
雲の[illegible]只西つけ海晴れてく　完来
[illegible]竹婦人　蓼太
[illegible]竹婦人　月巣

竹婦人

此君と称へしよせ川竹婦人　蓼兎
竹より又すな[illegible]も淋し竹婦人　一公
諸猪に久ぬ猿や竹婦人　吐月
淋しさハ人にきらはき竹婦人　子交
抱[illegible]花落　落笠
嘯くや小町の骨や竹婦人　蓼太

竹簟

蟬

簟月を家居に出しけり　乍心

弓気の帯の細さやたかむしろ　蕪村

よそにも涼風吹ける事も簟　春儀

あなたなし去るまゝに蟬の声　嵐雪

夏あさきぬ里人はなしせみの声　完来

蟬なくや田巡りする那一定　河陵　白酔

日盛や蝦川ほとり蟬の声　廿　杉雨

蘇ちに入る別もなしせみの声　故　班象

先つ蟬や蟬の音は菜の花　寥松

蟬なくや日御天て居る松の下　廿　梅堂

竹にまて我蟬なくと鳴ます　嵐堂

杉山を蝉ひろなたり蟬の声　班石

世の程峰てや蟬の立よりけり　廿　須兒

まつ蟬や鳴し啼て立もせす　居逸

きのふまて啼しる蟬の衣　スルカ　洛梅

蟬なくや木曽の白の木立月　オヽハラ　素兄

杉の手つあるに淋しよまの蟬　亀笑

蟬は天龍帯に似るか　乍心

一山の枯木にも啼ぬ蟬は声　六峰

傍に蟬に稜の棒の前　吐月

きりり井

きりり井や水の中のりも青かと　蓼太

夕立

夕立や隣りにかけける竹処　嵐堂

夕立のあとでもありき牛のこゑ　史登
夕立や何かしらとなる船の響　天府
中ふるや濡色見せて棟の花　吐月
夕立や放けふりさつ(?)ふりけり　百里
夕立やおとに切るゝ傘の音　千牛
夕立や雲下して来る沼の魚　南斗（カヌチ）
夕立にむかふの森の笠揃ふ　左更（スルガ）
夕立や探て走る人の里　山幸
夕立や袴子志はしく為涼し　歌白
夕立の後うしかれ生田川　百鏡
夕立や屋ふる犬を迷はすの家　士明

夕立や消りゆく高瀬舟　梧泉
中ふるちや川響し来る一露　柔古
夕立や晴て志はらく松子風　楚水
山もや夕立過る鐘乃声　故流
夕立や濡てくち四二つ旋　宜麦
夕立や匂りて晴る人の跡　麻石
夕立や思ひすてにぬれて芸者　午心
中ふるちやとえし里かる荒畑　六窓
夕立や雲も放れ来る最上川　栴義
中干や鳥の羽打も濡るまで　蕣太
むしかしも晴るゝ葵極のもと　人左

嘉定
清水

むし干や京から出る古こよみ　虚舟

虫干の襟見て書き月日かな　月窓

むし干や机に一日乃留主　班象

虫干や古しうつる虫ばかり　青牛

むし干や涜はやせはなれ月　山朝

秋風乃細まゐる与用かな　秋杵

十六諸寛覚一ツや赤竜嗜　蓼太

後ちくももれぬくぬ清水かな　仝

衣を押まれの雲や若清水　完来

あやしハ在子何まるぬ若し川　普成

掬ろてさらさら清しぬ水　六窓

湧よりも流出て多は清水かな　暁長

足入ぬ人の心かしらつゝかな　月巣

むすぶ節ハあるはかりけり清水かな　吐月

有りうる松風や清水もれ漏松かな　雪萬

一筋に出し清泉に葛今清水かな　故班象

貴くて田井の中なる清水かな　葛人

植えて山も千野の清水かな　巣鵞

松山も清水もちきる流れかな　魚流

山寺や庵をさるし流清水かな　素月

草の戸に石もしらぬ一つの清水かな　午心

何の僧も清水を濁すぬる野かな　蓼太

一寸の蟲もとらぬ清水かな　五舟
西行のころも涼し岩清水　楚狂
隣坊て出かきしき清水かな　月古
足ハよするめしき清水哉　其牛
人音ハ株の迹の清水かな　吏登
もやうし小萩をまする清水かな　午心
苔踏て人の右中の清水かな　運佐
かするはを待て岩ほ清水の恩　鳳宿
六月に来て年のつく清水かな　蒲太
とこらせと石寄ある苔清水　蓼巴
路かけの松に風ある清水かな　至涼
さらふて鰹の流る清水かな　盤中
山陰の月日あかる清水かな　六窓
手よりて汲ハさらいつも苔清水　金羽
家野川中に流る清水かな　蓼太
鰺せりつ椅子まる清水かな　寛之
為る笹葉をもりし清水かな　士朗

鵜

大ほつと潜るくなる鵜舟かな　吏登
山川を湯みして行鵜ぶねかな　兼太
鵜きよりこゝろよりも老のさま　玉字
呉もよへ来る松明かな　鵜の舟　也哉年
新路て鵜の匂ひ月夜かな　澤景

蓮

九ツれも寒しいきふ折個の所　意朝

折きいの影見て娘みひりと　如毛

つる折乃淋ましき百銭賤りけり　達琴

白蓮よ人影きいらおゆるうち　葉太

飯のうちまねもの上蓮の花　青牛

白蓮の白いあるきもそ根あかり　魚光

蓮の香や小紫らは下る石橋いよつ　阿人

折られて蓮より清む心の外　一驚

蓮なるて涼しちるるも又涼し　吐月

西の蓮とかとし一味子用あるさ　沙羅

蓮の葉や一の川月あらぬ人のかれあ　葉太

蓮乃雲や葵るも赤いし嶺　宗来

咲蓮にふる雲と打ちけ蓮はる　千人

ぬれて降ってさいし蓮の露　家松

紫陽花

打ちきぬを五器にまちゃ竹桂　嵐雪

紫陽花の七月きまりあの綵　曲坊

打ちもぬや花まひいもる事も味　吐月

紫陽花や色見てよう七小町　家茶

川狩

川狩や孔も必竟世なるよ　大江丸

撫子

なでしこやきれかゝりてなつかしき　蕪笠

花夜や晴天おしてなかり川　善成

なでしこや小石の中に打まじり咲　松枝

汗拭

恐ろしけれ和中さへきや汗拭　嵐雪

納涼

大みち犬を追ふ夜の涼かな　肖雪

皿ひとつ氷にくゞくすゞみての茶　蓼太

まろきしかしまでもの橋く里の月　吐月

夕すゞみ中しき長刀かな　完来

かゝみ涼み出の月おちかな　蒼虬

涼しさや帆の捨ての浅瀬寄　下児

去年の屋盗人追ふて夕涼　蓼太

あれありて月見の何の門涼み　夜白

すゞしさや鳥には傍を松ありて　巴丈

手の内を吹して涼の郷　文足

渡船を問ハ新し夕すゞみ　吐月

赤ひりの影にならぬ涼舟　完来

夕涼傍ましみしみさし川ぞ　布谷

すゞしさや撥もあらぬ松の蓋　不騫

夕涼鈍ぬ船もなかりけり　蓼茂

夕すゞみ茶碗の向きを掃せけり　𠂤松

涼しさを我家にもちかへりけり　大江丸
月の出て知る人多きすゞみかな　吐月
すゞしさや宮仕舞たる林の雲　蓼太
蟻の身の露の絶や下すゞみ　武 班象
ゑつしは何をするにも夕涼　暁長
月代のすゞしきうちや涼み舟　普成
紫陽花やけいせいなとふる夕涼　百里
夕すゞみ女を隣つ衣なれば　秋鬼
唯あかき名を呼れけり門すゞみ　一巣
灯を消さぬ家も月しけり夕涼　貞松
[illegible]涼み月を見に　竹阿

子は寝れば里は石の間の涼かな　竹人
月の出を見て涼しや松の間　士朗
涼しさは小松の中の飯の茸　荊文
蓑一つ鞠蹴て出る夕涼　普成
夕すゞみ椽たゝきけり筏まで　重路
娘つれて川を隔て門すゞみ　月守
財布けて家橋越や夕涼　きア 鬼月
すゞしさは椽すゞしたる月夜かな　青朝
いつも井の上の涼しや峰の寺　露澄
すゞしさは墓石の寺計り　蓼太
嵐や星摘はかり夕すゞみ　月巣

御祓

夕すゞミ橋の見える小家かな　有呆

川すゞみ四条の月を聞けり　業古

風あれも水無江戸の涼かな　季鳴

夕涼負墨銭呑む都かな　寥松

蹈つても居るもよ川涼　菅稚

夏祓月のゆふべや淡路島　嵐雪

人去て淋しさ見えけり御祓川　蓼太

紀りの川夜をもあけの首途かな　不騫

麻の葉ながるゝに杖見る御祓かな　虚舟

千年杉のよるやきく也御祓かな　五麗

正直の影をさへ菖蒲の祓　六窓

影うつるみえさよ安川祓　普成

形代の猴を友の志らしかな　吐月

御祓まくおりしに人を小の月　青牛

きや經よもすがら御祓川　蓼太

昭和學園 大短
第6295號
受入
36. 3. 14